31回 全国バズ学習研究大会（第1分科会）

学校態勢で取り組んだ環境教育

～そこから中学校における総合的な学習の在り方を考える～

資料編

① 中学校で「総合的な学習の時間」をどうつくるか（私案）
② 南城中学校の環境教育

愛知県春日井市立南城中学校　堤　泰喜

宿題 「総合的な学習の時間」をどうつくるか

1999・8・26
南城中　堤

宿題1　現在ある行事をどのようにして「総合的な学習の時間」へ組み込むか

① 行事を「総合的な学習の時間」と密接にタイアップさせる。⇨P4 年間計画案参照

- 行事の目的・内容を，「総合的な学習の時間」の目標・年間計画に合致させる。
- 旅行的行事の目的地や時期は，“学年によって”毎年変わることもありうる。

  例　1年宿泊学習=1泊2日で秋の高原散策　2年野外学習=2泊3日のスキー合宿　3年修学旅行=2泊3日長崎・ハウステンボス

- 文化的行事は学校全体にかかわるので，ある程度一貫性(毎年同じような流れ)を保ちたい。

② 行事の前の「総合的な学習の時間」は，その行事に向けた生徒の話し合いや準備にあてる。（⇨従来のように，学活や道徳の時間を行事の準備の時間にあてない。）

宿題2　「総合的な学習の時間」のテーマ

教師間	**「地球市民」を育てる総合的学習** *(Global citizen)* 〈設定理由〉「宇宙船地球号」の乗組員という意識と「共生」の姿勢を持ち，「グローバル」な視野から21世紀を生きる生徒を育成したい。
生徒向	例1 「未来にはばたけ！地球人(Globalist)！」 例2 「ぼくらは宇宙船地球号の乗組員！」 例3 「Love Our Planet!」 例4 「Enjoy! Learning!」 例5 「Do Your Best!」

宿題3　南城中として「総合的な学習の時間」の名称をどうするか。

総合的な学習の時間	「Global Time」	略称 GT
選択教科履修の時間	「Minamishiro Seminar」	略称 MS

宿題４　社会科と「総合的な学習の時間」とのかかわり

国際理解・環境・福祉・人権・情報・平和・郷土・人間の歩み…等と，総合学習の柱とされる主要概念は，これまでその多くを社会科が担ってきたといっても過言ではない。また，地域学習・問題解決学習・フィールドワーク・体験学習・表現活動・ＮＩＥ学習シミュレーション学習(ﾛｰﾙﾌﾟﾚｲなど)・討論学習(ﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ・ﾃﾞｨﾍﾞｰﾄ…)などの学び方（スキル）も，従来の社会科で十分に研究され，実践が積み重ねられてきた。その意味で，**「総合的な学習の時間に，社会科のおいしいところをとられた…」**と嘆く社会科教師もいる。

さて，本題の「総合的な学習の時間」と教科としての社会科とのかかわりであるが，社会科で培う社会認識(歴史で言えば歴史認識)・主権者意識・情報処理能力・コミュニケーション能力等が，「総合的な学習の時間」の取組の中で“他教科”と融合し，**ネットワーク化**されて，自己教育力や文部省の提唱する「生きる力」が，スパイラルに成長していくというイメージを描いている。

したがって，「総合的な学習の時間」の新設に伴い，社会科の在り方も根本的に見直さなければならないと思う。個人的には，とりあえず**「社会科の基礎・基本とは何か」**というテーマについて，初心にもどって勉強していきたいと考えている。

宿題５　時間割編成についてどのようにしたらよいか ⇨P14~16参照

① ３５週で“割り切れない”教科の時間数を調整するため，学期によって「時間割」を変える。（★２学期を前半・後半にわけ，全部で４期制とする）

〈割り切れない教科〉　音楽(1年)＝45時間　美術(1年)＝45時間　社会(3年)＝85時間
理科(3年)＝80時間　保健体育(1・2・3年)＝90時間

② 「選択教科」の取り扱い

- 総合的な学習の時間の内容と区別するため，より**教科の専門性**を高める。
  ⇨名称「Ｍｉｎａｍｉｓｈｉｒｏ　Ｓｅｍｉｎａｒ　(仮の略称=MS)」
- 小規模校なので大変困難であるが，可能な教科は，ＴＴにする。
- 第１学年は，**実施しない。**
- 第２学年は，**２時間続き**の授業で１教科を履修する。
  （音楽・美術・保健体育・技術・家庭の中から選択）
- 第３学年は，**２時間続き**の授業を２教科を履修する。
  ＭＳⅠ…国語・社会・数学・理科・外国語の中から選択
  ＭＳⅡ…音楽・美術・保健体育・技術・家庭の中から選択

③ 「総合的な学習の時間」の取り扱い

- 名称を「Ｇｌｏｂａｌ　Ｔｉｍｅ　(仮の略称=GT)」とする。
- 金曜日の午後を中心に設定する。
- 行事の前は，時間割変更をし，ＧＴの時間を集中させてもよい。
- 特別活動・行事等で欠けた教科の時間は，適宜ＧＴを利用して補う。(従来の裁量扱い)

④ 「総合的な学習の時間」の性格

- 基本的に“学年単位”でカリキュラムを考案するが，成果があったものについては，次年度に継承していく。（⇨**学年カリキュラム**）
- 学校全体の講演会や国際交流会，体育大会の準備など，全校あげて取り組まなければならないもの。（⇨**学校カリキュラム**）
- 卒業研究のように生徒が自ら立案し自ら実践するもの。（⇨**個人カリキュラム**）
- 北城小学校・神領小学校での取組の内容を十分把握した上で，立案したい。

⑤ 評価について

- 各時間ごとに**自己評価**・相互評価させ，ファイルにとじさせる。
- そのファイルを見ながら，担任が適宜“支援”を行う。
- 日々の活動の観察だけでなく，ファイルの内容や作品，掲示物，発表の様子などから総　　合的に評価する。（**ポートフォリオ**）
- 学年末に，生徒個々の総合的学習の取組について「通知表」に記述する。

⇨ＡＣＣＥＳＳで枠をつくり，①数値の読込み→②担任による所見入力⇨③印刷
（通知表は，学期ごとに回収するのではなく，学期ごとにプリンタで打ち出す。）

＜ファイルにとじる学習記録の例＞

総合的な学習の時間　学習記録　　年　組　番　氏名

月　日（　）	第　週	時間目／　時間（計画時間）
テーマ		
活動内容	調査・体験・実験・製作・視聴・まとめ・発表 その他（　）	
活動場所		担当の先生　先生
学習評価	① 学習の課題にせまることができたか ② 計画通り活動できたか ③ 意欲的に取り組むことができたか ④ グループの人と協力することができたか ⑤ 今日の学習に満足しているか	1 2 3 4 5

今日の学習でわかったこと・感想・反省	次回の確認　月　日（　）
	何について どこで どのように
	先生からのワンポイントアドバイス
	印

＜　通　知　表　の　例　＞

（参考：埼玉県杉戸町立杉戸中学校）

テーマ	
自己評価	

観　点　別　学　習　状　況	
様々な課題から，自分の興味・関心をもとに，適切なテーマを見いだせる。	
情報や資料を主体的に収集・選択し，表現方法を工夫できる。	
人と人との関わりの中で，ねばり強くテーマを追求できる。	
既習事項をもとに，自分のできることについて考え，実践できる。	
他の意見を尊重し，自分の考えをまとめ，提言できる。	
所　見	

◎＝取組が顕著である　○＝前向きに取り組んでいる　空欄＝特徴を認めがたい

総合的な学習の時間　年間計画案

月	週	第１学年	第２学年	第３学年
4	1	春休み	春休み	春休み
	2	学級組織の確立	学級組織の確立	学級組織の確立
	3	生 広げよう友達の輪！	環 I Love nature! ～成功させよう野外学習～	郷 未来都市計画「KASUGA!21」 ～修学旅行を有意義なものに～
	4	行 宿泊学習（集団生活）		
5	1	ゴールデンウィーク	ゴールデンウィーク	ゴールデンウィーク
	2	情 メディア学習 （情報基礎）	環 I Love nature! ～成功させよう野外学習～	郷 未来都市計画「KASUGA!21」 ～修学旅行を有意義なものに～
	3			
	4			行 修学旅行（課題探究）
6	1		行 野外学習（自然体験）	郷 未来都市計画「KASUGA!21」 ～修学旅行を有意義なものに～
	2	郷 みなみしろ探検隊！ 校区の自然・歴史・産業 生活・交通・文化・伝統 などをフィールドワーク。 ⇨学年発表	生 ディベート甲子園！ ディベートを楽しみ，コミュニケーションの能力を高める。 学級⇨学年ディベート大会	未来都市・春日井は，どうあるべきか，巨大先進都市東京や横浜の長所・短所をを参考に考え，自分達の構想を発表する。⇨学年発表
	3			
	4			
7	1			
	2			
	3			
	4	夏休み	夏休み	夏休み （高校体験学習）
8	1			
	2			
	3			
	4			
9	1	生 盛り上げよう体育大会！ （縦割りによる応援合戦）	生 盛り上げよう体育大会！ （縦割りによる応援合戦）	生 盛り上げよう体育大会！ （縦割りによる応援合戦）
	2			
	3	体育大会	体育大会	体育大会
	4	国 世界のみなさんこんにちは！	環 「Think Globally , Act Locally .」 環境問題について考える	総 卒業研究（テーマ設定）
10	1			
	2			
	3	離 校外学習（リトルワールド） ↓ 学年競 世界の衣食住・文化伝統・産業等について調べる。	離 校外学習（フィールドワーク） ↓ 学年競 身近なこと，やれることから実践する。	卒業遠足 農業体験 （or12月に日帰りスキー）
	4			
11	1			
	2			
	3	学校競 南城フェスティバル	学校競 南城フェスティバル	学校競 南城フェスティバル
	4	生 読書会を開こう！ クラスで一冊の本について語り合う。	生 ライフスキルを磨こう！ 健康の増進について考える。	総 卒業研究（追究）
12	1			
	2			
	3			
	4	冬休み	冬休み	冬休み
1	1			
	2	生 生き方を見つめよう！ ～職場体験学習～ 病院・コンビニ・飲食店 工場・商店・ケーキ屋等， 地域の協力を得て行う。 ⇨学年発表	福 バリアフリーって何？ ～福祉について考えよう～ 車椅子・手話・点字・ アイマスクなどの体験学習をとり入れる。 ⇨学年発表	総 卒業研究（まとめ）
	3			
	4			
2	1			総 卒業研究（発表）
	2			
	3			
	4			生 さようなら…南城中 奉仕作業・レク
3	1	国 宇宙船地球号に乗ろう！ ～国際交流会を成功させよう～	国 宇宙船地球号に乗ろう！ ～国際交流会を成功させよう～	
	2			春休み （国際交流会）
	3	行 国際交流会	行 国際交流会	
	4	春休み	春休み	

生＝「生き方」にかかわる学習
国＝「国際理解」にかかわる学習
環＝「環境」にかかわる学習
行＝学校行事
福＝「福祉」にかかわる学習
情＝「情報」にかかわる学習
郷＝「郷土」にかかわる学習
総＝すべての要素にかかわる学習

総合的な学習の展開例　第1学年

広げよう友達の輪！	宿泊学習に向けての準備	3時間×2＝6時間

- 学年集会（学年オリンピックの準備など）
- ファイヤー隊形（フォークダンス練習）

宿泊学習	親睦・交流と自然体験	行事

- 自然体験
  ウォークラリー（自然を見つめる問題を解きながら…），グリーンウォッチング
  星の観察，バードウォッチング，落ち葉のしおりづくり，都市緑化植物園の花のスケッチ
- 学年オリンピック（クラス対抗），ファイヤー（クラスの歌・キャンドルサービス）

メディア学習	情報教育の基礎を学ぶ	3時間×4＝12時間

① 演習「情報とは何か」「著作権とは」（情報発信のマナー・ルール）
② 情報収集・処理の仕方
- 新聞記事の活用法（スクラップの方法，複数の新聞記事の比較）
- プリント類のファイリング，ノートの活用法

③ 機器の使い方
- ＯＨＰや０ＨＣの使い方，ＴＰシートの作り方
- コピー機・印刷機・電話を使用する時の基本的な約束

④ コンピュータの使い方
- 基本操作とルール
- インターネット活用法（ホームページの開き方，メールの送り方）
- デジタルカメラの使い方

みなみしろ探検隊！	地域を見つめ，地域に学ぶ	3時間×6＝18時間

① 「みなみしろ探検隊！」の主旨や概要を知る。
- 班編成をする。
- フィールドワークの手立てを知る。
  電話のかけ方，名乗り方，取材依頼の仕方，当日の服装，挨拶の仕方，言葉遣い
  取材の仕方，感謝の気持ちの表し方，安全確保の手立て（緊急時連絡方法）など

② 自分たちが興味・関心の持てるテーマを設定する。

例 「米作りの達人に聞く」「地名を考える」「大型店ユーストアの知恵と苦労を探れ！」
「おすすめ５つ星の店」「春日井ＩＣの利用車は１日何台？」「オセンゲ古墳の謎を追え！」
「密蔵院の秘宝」「堀ノ内は区画整理で一体どんな町になるのか」「下街道の馬頭観音」
「大泉寺のぶどうはなぜうまいか」「伝統芸能・不二太鼓」「神領車庫って何だ？」「祭り」
「サンクスとミニストップどっちがすごい？」「特集：大学生！中部大学生インタビュー」
「校区の特産品」「地蔵川の水源を探れ！」「地域の街路樹と保存樹」「校区の地質」
「宅配便の取扱店はいくつある？」「保育園と幼稚園の違いって何だ」「変電所のしくみ」
「ＣＫＤや東京焼結は何の工場？」「水耕栽培ってすごい！」「平和公園の大賀ハス」

③ 取材の下準備をする。

- 挨拶の手紙や個人写真つきのプロフィールを作成して取材先に送る。
- 事前学習（疑問点の洗い出し），取材当日の行動計画・役割分担

④ 現地取材に出かける。

⑤ 調べたことをまとめる。

- イラストや取材写真を入れたレポートを作成し，学習の成果をまとめる。
- ポスターセッションで発表する。（**＝学年発表**）

⑥ お礼の手紙を送付する。

世界のみなさん，こんにちは！	国際理解（異文化理解）	3時間×6＋4時間＝22時間

① 「異文化理解講演会」（内発的動機づけ）

- 日本と外国の文化の違い（ＡＬＴ・春日井市在住留学生など）
- 旅の経験談（ＪＴＢなど）

② 自分なりにテーマを設定する。

例 「私の世界一周旅行計画」「姉妹都市ケローナ」「日本とインドの食生活の違い」
「世界の民族衣装（サリー・チマチョゴリ・ポンチョなど）」「世界遺産マップをつくる」
「世界の音楽（ケーナ・オカリナなど）」「ハイジのふるさとを散策しよう！」
「国際ボランティア団体」「ＮＧＯ」「アジアのお祭り」「南北問題」「世界の国歌・国旗」
「日本とオーストラリアの関係」「人気ワインの産地を探る」「made in china を迫え！」
「フランス人とイタリア人はどっちがオシャレ？」「コソボについて考える」

③ テーマ別クラス編成（それぞれの教室に担当教師を配置→支援）

１０１教室	１０２教室	１０３教室	学習室１	学習室２
衣食住に関連するテーマを選択した生徒	音楽・芸術関連のテーマを選択した生徒	英語圏の諸国を調べる計画を立てた生徒	民族・歴史・地理関連のテーマを選択した生徒	観光・旅行・その他のテーマを選択した生徒
（家庭科教師）	（美術・音楽教師）	（英語教師）	（社会科教師）	

※ 該当する教科担当教師がその学年にいるとは限らない。（“できたら”の話である）

※ 同じテーマの生徒はグループをつくつてもよい。

④ 調査活動に入る。
- インターネットで検索（例：外務省のホームページ）
- 図書館や名古屋国際センターの活用

⑤ 校外学習「リトルワールド」･･･ 自分に関連のある項目の調査

⑥ まとめの活動（B紙・楽器の演奏・ＴＰ・国際新聞など）

⑦ 学級で「発表会」を行う。

読書会を開こう！	本に親しむ	4時間×4＝16時間

① 自分の読書生活を見つめよう。（読書の必要性や価値に気付く）

② 心に残った１冊の本を紹介しよう。

③ 『読書会』の方法について話し合おう。

④ 『読書会』で取り上げる本を決めよう。

⑤ 各自のペースで読み始める。

⑥ グループごとに話し合いのテーマを決めて話し合い，出された意見を全体に紹介する。

⑦ 主人公の生き方について，学級全体でディスカッションする。

生き方を見つめよう！	職場体験学習	2時間×7＝14時間

① 自分の特性をいろいろな角度から見つめ，どんな職業に向いているか話し合う。
- さまざまな職業について，仕事の内容を確認しながら，自己の興味・関心を確かめ，発表する。
- 自分の特性をまとめ，班で交流してよさを認め合い，さらに伸ばすとよいところを話し合う。

② 人々の話や職業講話などから何のために働くか考える。
- 働く目的について，家族や身近な人たちに聞いてきたことを交流する。
- ハローワーク所長の「職業講話」を聞く。（「企業が求める人材」など）

③ 職場体験の計画を立てる。
- 職場体験で具体的にどんなことを学びたいのか，明確にする。
- 職場体験をする上での注意事項を考える。
- 自分は，職場体験にどのような決意で臨むのか明確にする。

④ 職場体験をする。（終日）

例　農業（園芸・酪農・水耕）・和洋菓子店・パン屋・スーパー・コンビニ・ホームセンター書店・電化製品店・飲食店（喫茶店・ラーメン屋・すし屋・中華料理屋・ファミリーレストラン）・ホテル・結婚式場・小売店・建設建築・美容院・床屋・図書館・消防署・郵便局陶芸・病院・老人ホーム・幼稚園・保育園　など

⑤ 報告書をまとめる。（学年で小冊子にまとめる。時間があれば「職場体験発表会」を開催する。）

⑥ 体験活動の感想と事業所へのお礼の手紙を書く。

※ 傷害補償額1000万円，賠償補償額３億円ぐらいの保険に加入させたい。

※ 幅広い職種の選択肢を確保するため，校区外の事業所も可とする。

第2学年

I Love nature!	野外学習にむけての準備	2時間×5＝10時間

- 自炊献立の話し合い
- 学級スタンツの練習
- 学年集会…ファイヤー全体練習，「野外学習の心得」

野外学習	「自然体験」に力点を置く	行事

- 豊富な自然体験ができる宿泊施設（キャンプ場）を選ぶ。
- 本校は毎年「山」だが，「海」も選択肢に入れたい。
- 冬に**「スキー合宿」**をするのも一案である。（雪国の生活についても学ばせたい）

ディベート甲子園！	コミュニケーション能力	2時間×6＝12時間

① 「ディベートとは何か」を知る。（ビデオ）

② チーム編成を行う。
- クラスの中で8班つくる。（1班4人～5人）
- 男女混合・等質班

③ 生徒の生活に密着した論題を設定する。

例 「ゴミ収集は有料化すべきである」　「出席簿は男女混合にすべきである」
「給食をやめて弁当持参にすべきである」　「高校は義務教育にすべきである」
「凶悪犯罪は少年でも厳罰にすべきである」　「割り箸は森林破壊である」
「江戸時代の鎖国は正しい選択であった」　「死刑制度は廃止すべきである」
「総理大臣は国民の直接投票にするべきである」「夫婦別姓制を導入すべきである」

④ 組合せを決める。

論題1　肯定側（Aチーム）VS否定側（Bチーム）
論題2　肯定側（Cチーム）VS否定側（Dチーム）
論題3　肯定側（Eチーム）VS否定側（Fチーム）
論題4　肯定側（Gチーム）VS否定側（Hチーム）

⑤ ディベートの準備をする。
- 役割分担
- 資料収集（インターネットの活用）
- 立論作成
- 提示資料作成
- 発表練習
- 質問対策

⑥ ディベートを行う。（「立論」「尋問」「反駁」「最終弁論」）
- 全員がディベートに参加。
- ディベーターでない時は審判を行う。

⑦ クラスで2チームを選考し，**「学年ディベート大会」**を行う。

「Think Globally , Act Locally .」	環境問題について考える	2時間×8＝16時間

① 「環境フォーラム」を開く。

- クリーンセンター所長をはじめとして，環境の問題に詳しい方（各機関の代表）を招く。
- 生徒が環境に興味を持ち，生徒の視野が広がるようなお話をしていただく。

② 自分達の住む春日井市・南城校区の環境調査をする計画を立てる。

- グループ編成とテーマ設定

〈例〉 内津川の水質調査（パックテスト「COD」「NO_2」「PH」など）
酸性雨調査　庄内川の水生生物　放射能調査（科学技術庁『かはるくん』）
交通量調査　生活廃水　南城中の植物図鑑　ゴミ処理の実態

③ 現地調査に出かける。

④ 校外学習（1日）…自分達で調べたことや環境認識をさらに深めるための取材学習。

〈例〉 春日井市クリーンセンター・市役所（公園緑地課・河川廃水課・環境対策課など）
春日井市環境分析センター（高蔵寺）・リサイクルの市民団体・でんきの科学館
エコパルなごや（環境問題）・ウッディランド名古屋・名古屋市生活衛生センター
名古屋国際センター・下水道科学館・名古屋市リサイクル推進センター

⑤ 調べたことをまとめ，発表する。（学年発表会）

⑥ 自分達にできることはないかを，クラスで考え，実践する。

〈例〉 「缶0（ゼロ）運動」「公園をきれいに」「地蔵川の清掃」「給食の残りで肥料をつくる」など

ライフスキルを磨こう！	健康維持の生活技能	3時間×4＝12時間

① 「健康」に関係のある計算式を出す。

・身長と体重のグラフ　・身長から求める標準体重の式　・ローレル指数

② 食べ物からエネルギーがどうして出るのか。～カロリーの概念～

③ 健康ドリンクの成分を探れ！『リゲイン』『リポビタンD』『エスカップ』『チオビタ』

④ 「○○な体」になるための食事メニューと運動メニューを考える。

・同じ願望の生徒5～6人で1グループをつくる。
・テーマを決める　A ダイエットしたい！　B 筋肉質になりたい！
C 頭がよくなりたい！　D にきびをなくしたい！
E 骨を強くしたい！　F ストレス・イライラをなくしたい！

⑤ 考えたメニューに基づいて班ごとで「調理実習」を行う。

⑥ 学習成果を発表する。（食事メニュー・運動メニュー）

例 B班（筋肉班）…プロテインたっぷりメニュー→キムチ鍋・卵おじや・プロテインミルク
C班（頭脳班）…DHAとよく噛むことで脳の活性化→イワシハンバーグ・タコの酢の物

⑦ （時間があれば）発展学習＝「警告文」をつくろう！

例 「薬物に手を出したいと思っているあなたへ」
「たばこを吸いたいと思っているあなたへ」

バリアフリーって何？	福祉について考える	3時間×7＝21時間

① 身近なバリアフリーを見つけよう。

エレベーターつき陸橋・階段昇降機エスカル（駅などに設置）・車椅子の人が利用できるトイレ
階段のわきについている車椅子用スロープ・点字ブロック・ノンステップバス・晴盲共遊玩具
盲導犬・聴導犬・押すところに印のついたシャンプー・パラマウントベット
音楽のでる信号…

② バリアを体験してみよう。

- 車椅子　・アイマスク　・口でくわえて文字や絵を書く
- ヘッドホンを着用して歩行

③ 「福祉講演会」を開く。

- 「デイ・サービスセンター」「老人ホーム」「愛知県コロニー」など，福祉関連に尽力してみえる方の話を聞く。
- 高齢者や障害者にとって，何がバリアになっているか考える。

④ バリアフリーの社会をめざすには何が必要かを考えよう。

- 施設のバリアフリー
- 街のバリアフリー　★ 今後必要なバリアフリーを考える。
- 日用品のバリアフリー
- 家の中のバリアフリー
- 制度に見るバリアフリー（介護制度・ハートビル法）

⑤ “心のバリアフリー”について考える。

- 「私たちの心構え」「私たちにできること」を話し合う。
- 介護場面を想定したロールプレイを行う。
- ボランティア活動に参加している方から話を聞き，共生の精神について考える。

⑥ 自分達にできるボランティア活動について話し合う。

⑦ やれるところから取り組もう！（老人ホーム訪問など）

第3学年

未来都市計画「ＫＡＳＵＧＡＩ21」	未来を提案する学習	３時間×１１＝３３時間

① 春日井市のイメージについて考えよう。
- 名古屋市のベッドタウン
- 書の街
- 特徴や魅力に欠ける街

② **「アンケート調査」**を実施する。（南城中学校生徒・保護者・駅前出口調査・中部大学生）

〈題〉 1　春日井市の「よいところ」「よくないところ」をあげてください。
2　春日井市は住みよい都市ですか。
3　春日井市長に一番取り組んでほしいことは何ですか。
4　春日井市が発展するためには，何が必要ですか。
5　50年後の春日井市は，どうなっていると思いますか。　など

③ アンケート結果から，春日井市の“現状と課題”について話し合う。

④ 春日井市役所企画課の方を招き，**『第３次春日井市総合計画』**の概要を話してもらう。

⑤ 春日井市の現状・課題を「未来に向けてどうすべきか」「春日井市をどんな都市にしたいか」という視点から，グループごとで考える。

例　春日井市のゴミの問題，春日井市の福祉施設，春日井市の交通問題，春日井市の国際化，春日井市の駅前の開発（特に神領駅），春日井市の公園整備，春日井市の文化振興，春日井市の水問題，魅力ある街づくりには何が必要か，春日井市の犯罪と治安　など

⑥ 修学旅行「東京・横浜」で，２つの大都市の街づくりから何を学ぶか，計画を立てる。

例
- 「夢の島」をこの目で見よう！
- 未来都市「みなとみらい21」「お台場臨海副都心」「天王洲アイル」から学ぼう！
- 東京の交通機関（地下鉄・首都高速・山手線等）の利便性と弊害を調査しよう。
- カナダ大使館に行こう！
- 農林水産省へ行って，「明日の農家の姿」を考えよう！
- 大都市の公園の実態を探ろう！（新宿御苑・代々木公園・上野公園・山下公園…）
- 警視庁へ行って，都市の治安維持対策を知ろう！
- 東京都庁へ行って，「都市計画」「大都市が抱える問題」を取材しよう！
- 環境庁へ行って，「日本の環境対策」について考えよう！

⇩

⑦ **修学旅行（東京・横浜２泊３日）現地調査**

⇩

⑧ 修学旅行で調査したことをもとに，**未来都市計画「ＫＡＳＵＧＡＩ21」**のプランを立てる。

⑨ **「学年集会」**で自分達のプランを発表する。

⑩ 春日井市役所の企画課へ未来都市計画「ＫＡＳＵＧＡＩ21」を提出し，**“私たちの提言”**というかたちで，市政に参画する。

卒　業　研　究	これまでの学習の総仕上げ	3時間×13+2時間×3=39時間

① 自分の個性や自分のこれまでの学習を振り返り，これからの**「自分探し」「自分づくり」**につながる探究テーマを設定する。

- テーマを決定し，活動計画を立てる。
- 学級内でテーマ交流をする。
- 複数のメンバーによる共同製作・共同活動も「可」とする。

＜活動のタイプ＞

A 文献や聞き取り，フィールドワークなどにより，**調査・研究**をして，自分なりにまとめる。

B 音楽・絵画・ビデオ・ホームページなどの**作品**をつくる。

C 専門的な知識・**技能**を練習や学習により**獲得**する。

＜例＞ **「卒業論文」**「報告書」「緊急レポート！」（環境・福祉・人権・国際理解・健康・AIDS…）

２１世紀への提言

小説・随筆・俳句集・短歌集

『自分史』をつくろう！

続・環境調査

『生徒会だより』の英訳→Ｅメールでラットランド・ミドルスクールへ

地球語「英語」を話したい！（英会話の練習）

他校の“キーパル”とＥメールの交流

ビデオ『校区の歴史をたずねて』の製作

コンピュータによる**ホームページ（学校紹介）**づくり

南城校区ガイドマップの作成

ピアノ曲の作曲「僕は南城の坂本龍一！」

室内管弦楽の調べ

“癒し”の音楽の研究

バンド活動「ビートルズを演奏しよう！」

卒業作品（ロボット製作・絵画・暮らしに役立つモノ・書道）

創作ダンス「ＭＡＸを越えろ！」

いじめ撲滅のための**ミュージカル**

ディベートのスキルを磨く！

伝統工芸を学ぶ

手話で交流「耳の不自由な人に歌を届けよう！」

点字の研究

リサイクルと被服製作（不要な布でつくるファッションショー）

続・保育体験（伊藤幼稚園・ひなご幼稚園・神領保育園）

ガーデンプランニング

② 校外・構内の目的に合った場所で探究活動を行う。

③ **「学年発表会」「学年展示会」**を開く。

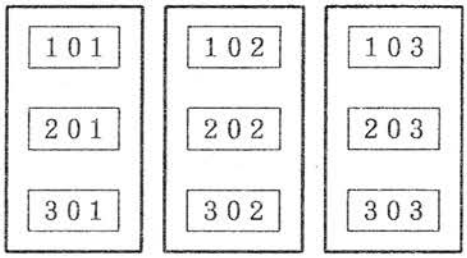
さようなら…南城中	最後の学校生活を楽しむ	2時間×3＝6時間

① 奉仕作業　～心をこめて～
② 卒業レクリエーション（球技大会）
③ すばらしい卒業式にしよう！（卒業式の練習）

学校カリキュラム

盛り上げよう体育大会！

- 体育大会で「たてわり」で応援合戦をする。
- そのための練習時間を確保する。
- 3年生は，夏休みの間に応援合戦の構想を練り，練習計画を立てる。



例
- 全員で器械体操
- 太鼓に合わせて演技をする
- 全員で歌う
- 曲に合わせて踊る

宇宙船地球号に乗ろう！

- 「国際交流会」の準備に学校全体で取り組む。
- Eメールで姉妹校との“生徒同士”の打合せもさせたい。
- ラットランドの中学生が来日しない年は，春日井市（あるいは近郊）在住の**外国人留学生**を招き，**「国際交流会」**を開く。（☞特に，アジア・アフリカの留学生を多数招きたい…）

地域の人から学ぼう！

- 現在行っている**『心の教育講演会』**を継承・発展させる。
- できたら，「わらぞうりづくり」など，地域につたわる**“伝統的な技”**の伝承もできると良いが。

時間割 第1学年

ＧＴ＝総合的な学習の時間

＜１学期＞　１２週

	月	火	水	木	金
1	道徳	国①	国②	国③	国④
2	社①	社②	社③	音①	美①
3	理①	理②	理③	技家①	体③
4	数①	数②	数③	技家②	ＧＴ
5	英①	英②	英③	学活	ＧＴ
6		体①	体②		ＧＴ

国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	技家	道徳	特活	選択	総合
4	3	3	3	3	1	1	3	2	1	1	0	3
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12
48	36	36	36	36	12	12	36	24	12	12	0	36

＜２学期＞　前半８週

	月	火	水	木	金
1	道徳	国①	国②	国③	国④
2	社①	社②	社③	音①	美①
3	理①	理②	理③	技家①	体③
4	数①	数②	数③	技家②	ＧＴ
5	英①	英②	英③	学活	ＧＴ
6		体①	体②		ＧＴ

国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	技家	道徳	特活	選択	総合
4	3	3	3	3	1	1	3	2	1	1	0	3
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
32	24	24	24	24	8	8	24	16	8	8	0	24

後半５週

	月	火	水	木	金
1	道徳	国①	国②	国③	国④
2	社①	社②	社③	音①	美①
3	理①	理②	理③	技家①	ＧＴ
4	数①	数②	数③	技家②	ＧＴ
5	英①	英②	英③	学活	ＧＴ
6		体①	体②		ＧＴ

国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	技家	道徳	特活	選択	総合
4	3	3	3	3	1	1	2	2	1	1	0	4
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
20	15	15	15	15	5	5	10	10	5	5	0	20

＜３学期＞　１０週

	月	火	水	木	金
1	道徳	国①	国②	国③	国④
2	社①	社②	社③	音①	音②
3	理①	理②	理③	技家①	美①
4	数①	数②	数③	技家②	美②
5	英①	英②	英③	学活	ＧＴ
6		体①	体②		ＧＴ

国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	技家	道徳	特活	選択	総合
4	3	3	3	3	2	2	2	2	1	1	0	2
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
40	30	30	30	30	20	20	20	20	10	10	0	20

授業時数	国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	技家	道徳	特活	選択	総合	合計
	140	105	105	105	105	45	45	90	70	35	35	0	100	980

時間割 第2学年

ＧＴ＝総合的な学習の時間
ＭＳ＝選択教科

＜１学期＞　１２週

	月	火	水	木	金
1	道徳	国①	国②	国③	美①
2	社①	社②	社③	技家①	音①
3	数①	数②	数③	技家②	体②
4	英①	英②	英③	体①	体③
5	理①	理②	ＭＳ	学活	ＧＴ
6		理③	ＭＳ		ＧＴ

国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	技家	道徳	特活	選択	総合
3	3	3	3	3	1	1	3	2	1	1	2	2
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12
36	36	36	36	36	12	12	36	24	12	12	24	24

＜２学期＞　前半８週

	月	火	水	木	金
1	道徳	国①	国②	国③	美①
2	社①	社②	社③	技家①	音①
3	数①	数②	数③	技家②	体②
4	英①	英②	英③	体①	体③
5	理①	理②	ＭＳ	学活	ＧＴ
6		理③	ＭＳ		ＧＴ

国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	技家	道徳	特活	選択	総合
3	3	3	3	3	1	1	3	2	1	1	2	2
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
24	24	24	24	24	8	8	24	16	8	8	16	16

後半５週

	月	火	水	木	金
1	道徳	国①	国②	国③	美①
2	社①	社②	社③	技家①	音①
3	数①	数②	数③	技家②	体②
4	英①	英②	英③	体①	ＧＴ
5	理①	理②	ＭＳ	学活	ＧＴ
6		理③	ＭＳ		ＧＴ

国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	技家	道徳	特活	選択	総合
3	3	3	3	3	1	1	2	2	1	1	2	3
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
15	15	15	15	15	5	5	10	10	5	5	10	15

＜３学期＞　１０週

	月	火	水	木	金
1	道徳	国①	国②	国③	美①
2	社①	社②	社③	技家①	音①
3	数①	数②	数③	技家②	体②
4	英①	英②	英③	体①	ＧＴ
5	理①	理②	ＭＳ	学活	ＧＴ
6		理③	ＭＳ		ＧＴ

国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	技家	道徳	特活	選択	総合
3	3	3	3	3	1	1	2	2	1	1	2	3
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
30	30	30	30	30	10	10	20	20	10	10	20	30

授業時数

国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	技家	道徳	特活	選択	総合	合計
105	105	105	105	105	35	35	90	70	35	35	70	85	980

時間割 第3学年

ＧＴ＝総合的な学習の時間
ＭＳ＝選択教科

＜１学期＞　１２週

	月	火	水	木	金
1	道徳	国①	国②	国③	美①
2	数①	数②	数③	理①	理②
3	英①	英②	英③	音①	体③
4	社①	社②	体①	体②	ＧＴ
5	技家①	MS4科	MS5科	学活	ＧＴ
6		MS4科	MS5科		ＧＴ

国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	技家	道徳	特活	選択	総合
3	2	3	2	3	1	1	3	1	1	1	4	3
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12
36	24	36	24	36	12	12	36	12	12	12	48	36

＜２学期＞　前半８週

	月	火	水	木	金
1	道徳	国①	国②	国③	美①
2	数①	数②	数③	理①	理②
3	英①	英②	英③	音①	体③
4	社①	社②	体①	体②	ＧＴ
5	技家①	MS4科	MS5科	学活	ＧＴ
6		MS4科	MS5科		ＧＴ

国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	技家	道徳	特活	選択	総合
3	2	3	2	3	1	1	3	1	1	1	4	3
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
24	16	24	16	24	8	8	24	8	8	8	32	24

後半５週

	月	火	水	木	金
1	道徳	国①	国②	国③	美①
2	数①	数②	数③	理①	理②
3	英①	英②	英③	体①	体②
4	社①	社②	社③	音①	ＧＴ
5	技家①	MS4科	MS5科	学活	ＧＴ
6		MS4科	MS5科		ＧＴ

国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	技家	道徳	特活	選択	総合
3	3	3	2	3	1	1	2	1	1	1	4	3
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
15	15	15	10	15	5	5	10	5	5	5	20	15

＜３学期＞　１０週

	月	火	水	木	金
1	道徳	国①	国②	国③	美①
2	数①	数②	数③	音①	理②
3	英①	英②	英③	理①	理③
4	社①	社②	社③	体①	体②
5	技家①	MS4科	MS5科	学活	ＧＴ
6		MS4科	MS5科		ＧＴ

国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	技家	道徳	特活	選択	総合
3	3	3	3	3	1	1	2	1	1	1	4	2
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
30	30	30	30	30	10	10	20	10	10	10	40	20

授業時数

国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	体育	技家	道徳	特活	選択	総合	合計
105	85	105	80	105	35	35	90	35	35	35	140	95	980

平成 5・6 年度

愛知県教育委員会
愛日地方教育事務協議会
春日井市教育委員会
委嘱

研　究　要　項

研究主題

豊かな感性と思いやりのある心を育み，温かい実践力を培う環境教育の推進

～身近な生活から出発し，主体的に取り組む生徒の育成～

平成 6 年11月11日（金）

春日井市立南城中学校

はじめに

最初に，“環境教育”という重要なテーマで研究・実践の機会を与えてくださった愛知県教育委員会，愛日地方教育事務協議会，春日井市教育委員会に深く感謝申し上げます。地球環境について新聞で垣間見る程度の知識しかなかった私たちにとって，この一年半はまことに貴重な期間でした。ずいぶん多くの人や書物に触れさせていただけました。

母なる地球に人類の祖先が誕生して以来，440万年もの悠久の時間を経て文明や科学が発達してきました。人間は快適な生活のために工夫に工夫を重ね，人間の生活にとって不都合なものを徹底的に排除する力をも手に入れました。その結果，この100年足らずの間に，人口は爆発的に増加し，地球環境は急激に悪化しました。生き物の基盤である水や空気の汚染，森林の破壊，多くの生物の種の絶滅と食物連鎖の断裁などを招きました。このような危機的状況に直面しても，なお人間は今までに得た快適な生活を捨てることができなくなっております。

多くの書物に目を通すうちに，「こりゃだめだ」と地球の前途に対して悲観的・絶望的になりかかったり，「環境教育は暗いね」と話し合ったこともありました。地球を一つの生物に例えるなら，人間はまさに地球に巣喰う癌細胞ではないかとさえ思うこともありました。癌細胞が増殖して自らの生存基盤である宿主を征服し死滅させるとき，自身も生き続けることはできません。それが分かっていて，なお増殖を止めることができないのです。

しかし，“教育とは希望を語ること”であります。このような状況のなかで地球環境のために地道に頑張っておられる様々な分野の人と出会い，お話を聞いたり活動に参加させていただいたりしながら，「今，自分たちに何ができるだろう」「小さなことでもいい，とにかく一歩を踏み出そう」と，生徒たちと一緒に勉強しながら多様な活動を進めてきました。

活動の体験を通して生徒も教師も少しずつではありますが確実に変容し，多くの概念に出会うことができました。例えば“人間が本来持っているはずの優しさこそが地球を救う”“本当に強くなければ優しくなれない”という概念は，“教師の優しい心こそが生徒の優しさを引き出す”“本当に強い教師は生徒にも優しい”ことを教えてくれます。「人間も実は自然のなかの一部であって，自然や様々な生物とのかかわりのなかで生かされている」という謙虚な言葉に込められた重みは“教師もまた生徒とのかかわりのなかで生かされている”ことに気付かせてくれます。また，学習指導要領で強調されている“主体的に対応できる能力や態度の育成”は環境教育においても重要なキーワードであります。私たちは，すべての授業において，その形態や方法を見直し，バズやディベートなどの協同学習を推し進めてきました。その結果，未熟ではありますが新しい学力観についての理解が深まったように思います。

今回の研究・実践をすすめる過程で，愛知県教育委員会の井谷指導主事，愛日地方教育事務協議会の佐藤指導主事をはじめとする多くの先生方から多方面にわたる貴重な御指導をいただきました。ここに深甚の感謝を申し上げます。また，これから先も「地球の素晴らしさは，生命の輝きにある。地球はあらゆる生命が織りなすネットで覆われている。その地球の美しさを感ずるのも，探究するのも，守るのも，そして破壊するのも人間なのである。」というレィチェル・カーソンの言葉をかみしめながら，子どもたちが本来持っているみずみずしい感性を喚び起こし，主体的に参加できる力を涵養し，そして子どもたちと一緒に仕事をしていきたいと考えております。一層の御指導と御鞭撻をお願いいたします。

平成6年11月11日

春日井市立南城中学校長　加藤孝史

目　　次

はじめに
Ⅰ　本校の概要
1　校区の概要 …… 1
2　学校の概要 …… 1
3　生徒の実態 …… 2
4　教育目標 …… 2
Ⅱ　研究の概要
1　研究主題 …… 3
2　研究主題設定の理由 …… 3
3　研究方針 …… 3
4　研究の全体構造図 …… 4
5　研究組織 …… 6
6　研究の経過 …… 6
7　これまでの研究の概要 …… 7
Ⅲ　教科における環境教育
1　教科における環境教育の基本的な考え方（研究目標と研究目標設定の理由） …… 9
2　教科における環境教育の進め方（研究課題と研究内容） …… 10
3　各教科における実践 …… 13
4　今後の課題 …… 21
Ⅳ　道徳における環境教育
1　研究目標 …… 22
2　研究目標設定の理由 …… 22
3　研究内容 …… 22
Ⅴ　特別活動における環境教育
1　研究目標 …… 24
2　研究目標の設定 …… 24
3　研究課題 …… 24
4　研究内容 …… 25
5　今後の課題 …… 32
Ⅵ　調査資料委員会における実践
1　研究目標 …… 33
2　研究目標設定の理由 …… 33
3　研究内容 …… 33
4　今後の課題 …… 34
Ⅶ　研究の成果と今後の課題
1　研究の成果 …… 35
2　今後の課題 …… 35
おわりに

Ⅰ　本　校　の　概　要

1　校区の概要

本校は昭和58年に東部中学校より分離独立し，春日井市13番目の中学校として開校した。開校当初は東部中学校の校舎の一部借用，プレハブ仮校舎での出発であった。開校の年の６月に現校舎に移転し，以来11年を経過した。

校区は春日井市の中央部のやや東寄りにあり，東名高速道路と国道１５５号線が南北に縦貫し，国道19号線とＪＲ中央線が東西に横断しているという交通の要衝にある。開校当初は学校周辺には水田や畑が多かったが，近年は区画整理事業が進行し，住宅が立ち並ぶようになり，近くに大型ショッピングセンターなどもでき，都市化の傾向にある。しかし，学校のすぐ西を地蔵川が流れ，正門の前にはよく手入れされた畑が広がり，その向こうには内津川が流れるという静かな田園風景も広がっている。校区の金ヶ口地区から大泉寺地区にかけての丘陵地帯には，緑豊かな雑木林が広がっている。また，かんがい用のため池も多く，校区には大小７つのため池が点在している。さらに，校区には重要文化財の「密蔵院多宝搭」，および「高御堂古墳」など数基の古墳も有している。このように，学校をとりまく自然・文化的環境は，明日の郷土を担う人づくりにふさわしい恵まれた環境にあるといえる。

保護者の職業は，給与所得者が多く全体の70％程度を占め，次いで自営業者が約16％，公務員が約12％，その他の職業従事者が約２％である。保護者の家庭に専業農家は１戸のみで，兼業農家は20戸（約４％）ある。また，共働き家庭は年々増加しており，生徒の半数以上の家庭が共働き家庭である。学校教育に対してはたいへん協力的であり，学校への期待も大きいものがある。

2　学校の概要

(1) 教職員数　２６名（うち県職事務員１名，市職用務員１名）

(2) 担当教科別教員数（校長・教頭・養護教諭は除く）

教　科	国　語	社　会	数　学	理　科	音　楽	美　術	保　体	技　家	外国語
人　数	3	3	3	3	1	1	2	2	3

(3) 学級数（平成６年度）

学　　年	第１学年	第２学年	第３学年	合　　計
学級数	4	4	5	１３

(4) 生徒数（平成６年５月１日現在）

学年／性別	第１学年	第２学年	第３学年	合　　計
男　　子	８０	８２	８３	２４５
女　　子	５６	７５	８８	２１９
合　　計	１３６	１５７	１７１	４６４

学校南方上空より撮影（平成４年７月）

3　生徒の実態

本校の生徒は明朗で素直な生徒が多い。昭和62年以降の国際理解教育の推進の中で自主性や自律性も育ちつつある。

生活面においては，反社会的行動に走るものは極めて少なく，服装や頭髪の乱れなどもほとんどなく落ち着いている。しかし，不登校やその傾向にある生徒が若干名おり，その対策には苦慮している。いじめ・登校拒否対策委員会での話合いや現職教育での事例研究会や学習会などの取組，関係機関との連携による指導などを通して克服への努力を続けている。

一方，学習面においては，学習することの大切さは認識しており，落ち着いて授業を受けることができる。しかし，指示待ちをする生徒も多く，授業で自分の考えを発表しようとする積極性や，自ら課題を発見し解決していこうとする姿勢はやや弱いところがある。

環境問題に対しては，緑の減少や河川の汚れなど，日常生活と結びついたことには関心は高いが，生徒会が自主的に取り組むリサイクル活動や河川敷の清掃活動への参加状況などは決して高いとは言えず，行動面での積極性が望まれるところである。

4　教育目標

友と仲良くし　自ら進んで学び合い　しっかり発言のできる南中生
～自分の人生を創る責任者は自分～

(1) 生命と人間を尊重し，自然を愛し，環境を大切にしようとする生徒を育成する。
(2) 個性豊かで，他の個性を大事にできる生徒を育成する。
(3) 自ら進んで学習し，生涯にわたって自分の生活を築こうとする生徒を育成する。
(4) 郷土を愛し，国際社会の中で信頼と尊敬を得る生徒を育成する。

Ⅱ 研 究 の 概 要

1 研究主題

「豊かな感性と思いやりのある心を育み，温かい実践力を培う環境教育の推進」
〜身近な生活から出発し，主体的に取り組む生徒の育成〜

2 研究主題設定の理由

本校は昭和62・63年度，愛知県教育委員会及び春日井市教育委員会から国際理解教育の研究委嘱を受けた。以来今日まで，国際社会に生きるにふさわしい青少年の育成をめざし，その根底に「友と仲良くし，自ら進んで学び合い，しっかり発言のできる南中生」（教育目標）を据え，教育活動全般の中で実践的研究を進めてきた。

明朗で素直な生徒が多いが，積極性にはやや欠けるという本校生徒の実態を踏まえ，自主性を育成するという課題にこれまで取り組んできた。これを環境教育という視点からとらえ直し，環境に対する感性をさらに磨き，優しい思いやりのある心を育て，環境問題を自己の問題としてとらえさせ，よりよい環境の創造に主体的に取り組む実践力を培うことを意図している。また，現在の環境問題の多くが，人々のより豊かで便利な消費生活へのあくなき追求とそれを支える生産活動によって引き起こされているとするならば，なおさらのこと環境教育を通して，環境倫理に裏付けられた人間としての在り方や生き方についての自覚を深めさせ，他者（人および自然）に対する温かい人間味のある働きかけのできる生徒を育成しなければならないと考え本研究主題を設定した。

この研究推進に当たっては，教師集団の共通理解と研究態勢の確立を促す方向で取り組みたい。さらに，この研究主題の追究は，教育目標を具現化するための有力な手だてとなり，学校に新たな活力を生み出すにちがいないと考える。

3 研究方針

中学生として何ができるかを基本に据え，着実で日常的な環境教育を推進する。

(1) 環境教育を学校の教育活動全体の中に位置づけ推進していく。

(2) 教科指導では，環境教育に関連する指導項目を年間指導計画の中に明確にする。さらに，それらを抜粋して一つにまとめた「環境教育年間指導計画」，および「軸テーマ別環境学習配列表」を作成し，教科間の連携を図り環境教育を推進していく。

(3) 道徳では，中学校学習指導要領に示されている内容項目の中で「3(1) 自然愛，(2) 生命の尊重，4(4) 勤労・社会奉仕・公共心，(9) 国際理解・人類愛」など直接的に環境教育に関連する指導項目を重視して取り組む。しかし，その他の指導項目でも間接的なかかわりが深いので，道徳教育全体をさらに充実させ，道徳的実践力を高め，環境教育推進の一翼を担う。

(4) 特別活動では，本校が従来からめざしてきた自主性の育成という課題を環境教育の視点からとらえ直し，さらに発展させる。学級の時間における環境にかかわる学習を「グローバルタイム」と名付け，全学級での取組を展開する。生徒会活動では環境保全への実践活動の場としての機能を重視し，生徒会活動全体の強化を図る。

(5) 本校が従来から取り組んできた国際理解教育とのかかわりでは，限られた地球環境の中に共存していく地球人としての認識をさらに深めさせ，今後の国際社会の在り方を環境問題の視点からもとらえることのできる生徒の育成をめざす。

4　研究の全体構造図

環　境　教　育　全

教育目標

友と仲良くし　自ら進んで学び合い　しっかり発言のできる南中生
～自分の人生を創る責任者は自分～

- 生命と人間を尊重し，自然を愛し，環境を大切にしようとする生徒を育成する。
- 個性豊かで，他の個性を大事にできる生徒を育成する。
- 自ら進んで学習し，生涯にわたって自分の生活を築こうとする生徒を育成する。
- 郷土を愛し，国際社会の中で信頼と尊敬を得る生徒を育成する。

憲　　法
教育基本法
学校教育法
学習指導要領

生徒の実態　明朗で素直な生徒が多い。国際理解教育の推進の中で自主性や自律性も育ちつつある。環境問題に対しては，緑の減少や河川の汚れなど，日常生活と直結したことには関心は高いが，生徒会のリサイクル活動への参加状況などは高いとは言えず行動面での積極性が望まれる。

地域の実態　校区は宅地化が進行しているものの，田や畑も比較的多く残っており，多くのため池や雑木林も見られる。生徒の保護者は環境教育にも深い理解を示し，資源回収や制服リサイクルなどの活動に積極的に取り組んでおり，地域もこれを支えている。

本校が従来から進めてきた国際理解教育との関連

かけがえのない地球環境の中で共存していく地球人として，国際社会の在り方をグローバルな視点から考えようとする生徒を育成する。

①　人間尊重の心の育成　②　平和を愛する心の育成
③　自国や他国の文化を理解し尊重する心の育成

環境教育の目標

育てたい生徒像　　**ほんとうのやさしさを追求しよう**

- 自然や美しいものに感動し生命や環境を大切にする生徒
- 社会の一員として協力してよりよい環境をめざす生徒
- 環境とその現実を自らの問題としてとらえる生徒
- 環境問題の解決のため自ら積極的に行動する生徒

研究主題

「豊かな感性と思いやりのある心を育み，温かい実践力を培う環境教育の推進」
～身近な生活から出発し，主体的に取り組む生徒の育成～

環境教育の基本概念

1975　ベオグラード憲章　環境教育目標6項目の設定
［関心・知識・態度・技能・評価能力・参加］

環境教育のねらい　「環境教育指導資料（文部省編）」

環境や環境問題に関心・知識をもち，人間活動と環境とのかかわりについての総合的な理解と認識の上にたって，環境の保全に配慮した望ましい働きかけのできる技能や思考力，判断力を身につけ，より良い環境の創造活動に主体的に参加し環境への責任ある行動がとれる態度を育成する。

研究の指針

- 学習指導要領・教育課程を基礎とし，学校教育全体の中で「環境教育」を推進する。
- Think Globally, Act Locally「地球規模で考え足元から行動する」を常に念頭におく。
- 知識の習得だけでなく，技能の習得や能力・態度の育成にも力点をおく。
- 生涯学習の基礎としての「意思決定能力」「自己教育力」を育成する。
- 自然環境のみならず，社会環境にもスポットをあてる。
- OISCAなどの環境保護団体とも提携して体験活動を深める。また，カナダの姉妹校と研究の上でも提携を結ぶ。

体　構　造　図

春日井市立南城中学校

研究の内容

授業を通して

各教科の授業実践を通してどのような環境認識を育てていくべきか，また「自己教育力の育成」を視野に入れながら，環境教育の目標である能力や態度を育成するためにはどのような手だてが必要か，その具体的な方法論を明らかにし，実践を積んでいくことをめざす。

① 「体験的学習」「問題解決的学習」を重視した授業法の改善に取り組む。（学習の援助者としての教師の役割の自覚）
② 「環境教育年間指導計画」「軸テーマ別環境学習配列表」を作成して発達段階に応じた指導と教科間の連携を図る。
③ 「自己評価の導入」「座席表の活用」などにより，生徒の変容をとらえる評価の工夫に取り組む。

各教科・道徳の実践努力目標

国語	「豊かな感性の育成」と「主体的な態度の育成」の2本を柱にして授業実践を進める。
社会	自ら課題を発見し，その解決に向けて自ら情報を収集して処理し，その結果生まれた「自分の考え」を自らの言葉で表現できる生徒を育てる。
数学	社会現象や自然現象を数理的にとらえ処理し考察する能力を育てる。
理科	環境や環境問題を主体的に調査・評価するための基本的な科学知識を身につけさせ，実験や観察を重視し，科学的に探求する能力・態度を育てる。
音楽	音楽鑑賞の能力を高め，情景・作者の意図・心情などを聴き取らせ，解釈した音楽をのびのびと表現できるようにさせる。
美術	身のまわりの環境の美的改善について考えさせ，楽しい学校生活や心豊かな社会生活を送るために必要なデザインを表現させる。
保・体	自然環境と健康とのかかわりと自分たちが生きている環境について考えさせる。
技・家	生活に根ざした教科として，環境問題の重要性に気付かせるとともに，よりよい環境を築くための実践的態度の育成を図る。
英語	国際理解教育との関連を考慮して環境教育を進め，各種教材・資料の効果的利用を通し，情報の収集・処理・発信など実践的態度の育成を図る。
道徳	自然界の一員として自然を愛し，生命に対する畏敬の念を高め，よりよい環境づくりに主体的にかかわることのできる実践的な行動力を育成する。

体験的活動を通して

環境や環境問題に対する個々の高まりを，自主的・体験的な活動を通してより確かなものとし，さらに，身近な問題に対する積極的な行動力へ発展させることをめざす。

特別活動（学校行事を除く）

- 学級の時間・短学活の充実，グローバルタイムの設定
- グローバルコーナー（国際理解委・環境委）・ミニギャラリー（広報委）の充実
- 環境集会，校内環境弁論大会などの開催
- 生徒会活動におけるリサイクル活動，校外清掃活動の推進
- 委員会活動における環境にかかわる活動の展開
- クラブ活動（部活動）における環境学習の実践

学校行事

- 宿泊学習・野外学習（動植物の観察，星の観察，自然体験など）
- 修学旅行（東京と春日井の住環境の比較，見学地別のテーマ研究など）
- 校外学習（見学地でのテーマ別研究）
- 学校祭（環境にかかわる展示・発表，フリータイムの実施）

地域や関係機関との連携・その他

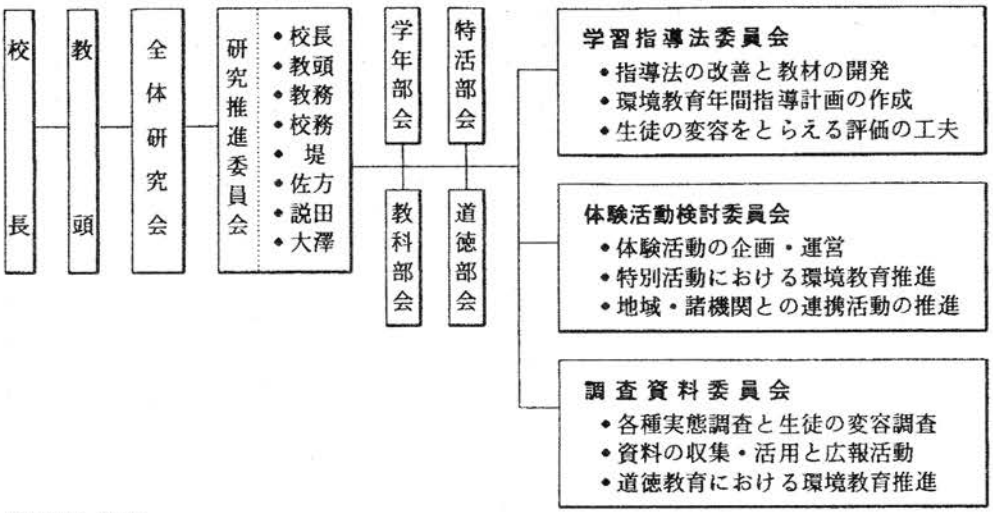
- PTAとの協力（地球資源回収活動・制服リサイクル活動）
- 講演会や環境映画会の開催，環境学習実践記録の作成
- OISCAなど環境保護団体との提携
- 学校でできる省資源の実践（両面印刷，はご紙の活用など）

調査・資料収集活動を通して

環境や環境問題に対する生徒の実態を調査する。また，適切な資料を提供することにより，意識の変容とより確かな実践力の育成に資する。

- 生徒の実態調査の実施とその分析・評価
- グローバルルーム（環境学習室）の計画と運営
- 環境教育にかかわる資料の収集（含評価）
- 職員室の環境コーナー（図書・ビデオ等）の整備と運営
- 広報活動の展開

5 研究組織



6 研究の経過

(1) 平成5年度の研究経過（概要）

学期	月	研究経過の概要
1学期	4月	○研究組織・研究計画（概要）の確認 ○教科・道徳・特活の重点努力目標の設定
	5月	○研究組織の編成と3委員会の発足 ○全体研究会［実践例；甲南中学校（滋賀県），銀座中学校（東京都）］
	6月	○第1回要請訪問（6/8）～研究の方向づけと共通理解～ ○ＰＴＡ主催「地球資源回収活動」実施（制服リサイクル活動開始）
	7月	○環境に関するアンケート調査実施（全校生徒対象）
	8月	○先進校視察（豊橋市立多米小学校），先行研究の調査
2学期	9月	○環境講演会・写真展実施（OISCA・春日井ライオンズクラブと連携して） ○環境教育年間指導計画～第1次案～作成 ○校外学習（1年南知多ビーチランド，2年名古屋市内寒刈行脚，3年妻籠・馬籠）で環境学習に取り組む。 ○授業研究（社会～ディベートの実践～）
	10月	○全国環境教育指導者実践研修会参加（福島県・那須甲子少年自然の家） ○環境講演会「チェルノブイリに学ぶ」実施
	11月	○国際植林活動〈生徒3名参加〉（11/11～11/15 フィリピン・ミンダナオ島） ○全国環境教育シンポジウム研究協議会参加（愛媛県松山市） ○研究会参加（愛知県教育センター「学校教育における環境教育の在り方」） ○授業研究（グローバルタイム～地蔵川の水質調査～）
	12月	○国際植林活動帰国報告会（OISCA・春日井ライオンズクラブと連携して） ○アンケート結果の考察と分析 ○授業研究（英語～ＡＥＴとのティーム・ティーチング～）
3学期	1月	○環境教育年間指導計画～第2次案～作成 ○環境集会の実施（VTR「アルミ缶のリサイクル」上映）
	2月	○第2回要請訪問（2/10）～中間のまとめ～ ○授業研究（理科・道徳・社会）
	3月	○広報紙「南城中だより」第1号発行（以降月1回の割で発行を継続） ○研究会参加（愛知教育大学教科教育センター「学校教育における国際化・情報化・環境・個性化をめぐる研究」） ○授業研究（グローバルタイム「海洋汚染と自然保護」 講師；名古屋港水族館長 内田 至氏） ○学習会「授業の基本技法と指導上の留意点」（講師；春日井市立中部中学校校長 松本重雄氏） ○今年度のまとめと次年度の計画立案（研究要項「中間のまとめ」発行）

(2) 平成６年度の研究経過（概要）

学期	月	研究経過の概要
1学期	4月	○研究組織の一部編成変え・各委員会の今年度研究計画の検討 ○教科主任会・教科部会（授業研究の計画・年間指導計画の改訂方針） ○学習会「バズ学習の基本的な考え方と手法」（講師；本校校長　加藤孝史） ○学習会「子どもが主体的に取り組む環境学習」（講師；愛知教育大学教授　有田和正氏） ○生徒総会（リサイクル活動等の生徒会の活動方針を決定）
	5月	○各学年の泊を伴う旅行的行事で環境にかかわる課題に取り組む ○授業研究（美術）
	6月	○全体研究会（グローバルタイムの取組の事例，今後の取り組み方） ○研修会参加（愛知県教育センター「環境教育研修講座」） ○授業研究（道徳・音楽） ○環境に関するアンケート調査実施（全校生徒対象） ○グローバルルームの整備（掲示用パネル等を設置）
	7月	○第３回要請訪問（7/11）～研究のまとめに向けて～ ○授業研究（社会・国語・技術・理科・数学・保体）
	8月	○全体研究会（発表会の日程等検討），教科部会（年間指導計画の検討），委員会（分科会の持ち方）
2学期	9月	○第４回要請訪問（9/27）～研究発表に向けて～ ○授業研究（数学・選択理科） ○学校祭（環境にかかわる実践の発表）
	10月	○校内環境弁論大会実施
	11月	○環境教育研究発表会（11/11）

7　これまでの研究の概要

(1) 学習指導法委員会における研究

ア　授業法の改善への取組

環境教育の目標を達成するためには，従来の画一的な一斉学習の学習形態だけでは不十分であり，より高い参加度を得るために多種多様な学習活動の導入が不可欠となってくる。そこで，話合い活動を重視した学習形態（バズ学習）を導入した授業実践や，ディベートの実践等に取り組んで，いくつかの実践を積み上げてきている。

多様な学習形態を導入するにも，その前提になるのは授業における規律の確立であり，基本的学習ルールの徹底である。授業における基本的学習ルールとして「指名されたときの返事」「大きな声で発表する」等の10項目をあげて，その一部は教室にも掲示し，生徒に投げかけてその徹底に取り組んでいる。

イ　「環境教育年間指導計画」の作成と活用

発達段階を考慮し，各教科・領域間の連携を図っていくことが環境教育を効果的に展開するための基礎となると考えて「環境教育年間指導計画」の作成を行ってきた。

全教師が教科ごと学年ごとに分担し，教育課程の環境教育に関連する指導事項を洗い出し，年間計画の中に位置づけていく作業を行った。さらに，教科の連携を図るために「軸テーマ別環境学習配列表」の作成にも取り組んだ。これらは平成５年度中に２次案の作成まで行った。その後，日常の授業の中で実際に検証を進め，平成６年９月には第４次案の作成を終えた。さらに，11月の研究発表に向けて引き続き検証を進めている。

ウ　生徒の変容をとらえる評価の工夫

生徒が授業を通してどのように変容していったかを把握し，次の学習に生かしていくことは

学習指導法の研究を進める上でたいへん重要な課題となる。そこで，本研究では「自己評価の導入」と「座席表の有効利用」を中心にして，評価の在り方についての研究を進めている。

(2) 体験活動検討委員会における研究

ア　学級活動における実践

学級は生徒の学校生活における基盤である。学級における体験活動をともなう環境学習の実践は生徒の意識や行動に大きな影響を及ぼすと考えられるので，重視して取り組んでいる。学級活動における環境にかかわる学習を本校では「グローバルタイム」と名付けて，すべての学級で環境学習に取り組むことを目標にして実践を進めている。

イ　生徒会活動における実践

従来から生徒会の自主的活動として行われてきたリサイクル活動や校外清掃なども，環境にかかわる活動として位置づけ直して取り組ませている。さらに，総合的に環境問題をとらえる生徒の活動組織として環境委員会を平成５年度から新たに発足させた。また，従来からあった各種委員会でも環境にかかわる活動を取り入れるよう努めている。

木曜日の朝の集会は生徒会が主体となって運営しているが，これを環境学習の場として活用する試みをしている。これを環境集会と名付けていろいろな取組を行っている。

ウ　学校行事における取組

校外学習（遠足）や宿泊学習，野外学習，修学旅行等の旅行・集団宿泊的行事では環境にかかわる課題を取り入れて実施するようにしている。さらに，学校祭のような文化的行事にも，環境にかかわる発表（夏休みの課題として取り組ませたものも含む）を組み込んで実施している。

エ　地域・関係機関と連携した取組

OISCA・春日井ライオンズクラブと連携し，国際植林活動への参加・協力として，環境講演会や写真展の開催，ミンダナオ島（フィリピン）での植林ボランティア活動への生徒３名の参加，帰国報告会の開催という一連の取組を行った。また，ＰＴＡと連携して地球資源回収活動や制服リサイクル活動にも取り組んでいる。

(3) 調査資料委員会における研究

ア　実態調査の実施

全校生徒を対象としたアンケート調査を平成５年７月に実施した。その分析から，生徒の身の回りの環境から出発する環境教育の重要性を把握することができた。さらに，生徒の変容を把握する意図から，同じアンケートを平成６年６月にも実施した。

イ　資料の収集と活用

環境学習を効果的に展開するための資料や教材の収集に努め，職員室には環境教育コーナーを設けて資料が活用しやすいように整備しつつある。また，グローバルルーム（環境学習室）の整備も進め，生徒が自由に活用できることをめざしている。

ウ　広報活動の展開

環境教育を推進していく中で，家庭（地域を含めて）への働きかけの必要性を感じ，保護者を対象とした広報活動として，平成６年３月から「南城中だより」を定期的に発行し始めた。現在は月に１～２回の割合で発行を続けている。平成６年６月に実施したＰＴＡ主催の「地球資源回収活動」に合わせて発行した号は生徒の手により校区のほぼ全戸へ配布することができた。

エ　道徳における環境教育の実践

環境教育の基盤となる環境倫理の形成の上で道徳教育の果たす役割は大きい。環境にかかわる道徳の指導内容を「環境教育年間指導計画」に位置づけて実践に当たっている。また，授業研究にも積極的に取り組んでいる。

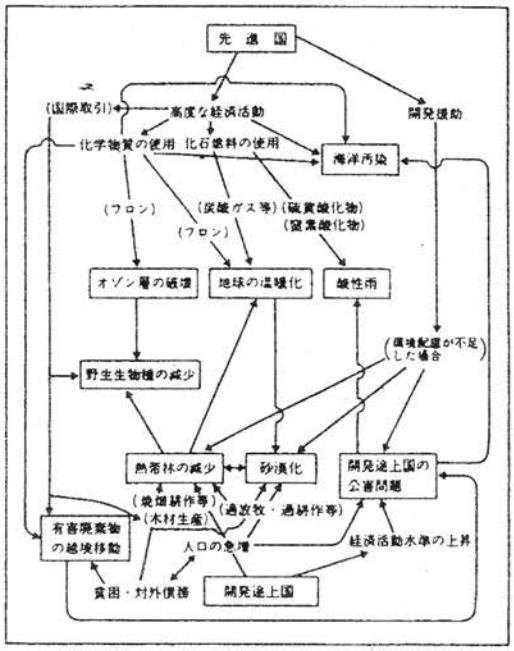
Ⅲ　教科における環境教育

1　教科における環境教育の基本的な考え方（研究目標と研究目標設定の理由）

熱帯林の減少，地球温暖化，オゾン層の破壊，酸性雨等の地球規模の環境問題や，都市・生活型の環境問題が極めて深刻な事態に陥っている。

今や“Only One Earth”（かけがえのない地球）の保全に向けた取組は，全人類共通の課題となっている。

学校教育の，とりわけ教科指導では「人間と環境とのかかわりについての認識」「豊かな自然や快適な環境の価値についての認識」「環境問題を引き起こしている社会・経済の仕組みや生活様式についての認識」「環境保全にむけた人々の努力に関する理解と共感」など，環境や環境問題に関する事実認識や現状認識を，科学的で客観的な資料に基づいた学習を通して深めていかなければならない。



問題群としての地球環境問題（『平成2年度環境白書』より）

また，文部省の『環境教育指導資料』には，「環境教育の目的は，環境問題に関心を持ち，環境に対する人間の責任と役割を理解し，環境保全に参加する態度及び環境問題解決のための能力を育成することにある」と記されている。したがって，教科における環境教育は，知識の習得だけにとどまらず，技能の習得や態度の育成をも，めざしたものでなくてはならない。

この能力や態度について，文部省はさらに具体的に右のように示している。これらの能力や態度を育成するためには，教師主導の知識注入型の授業から脱却し，生徒自らが学習の主体者（教師は学習の援助者）となる授業や，「社会参加を誘発する環境認識」の育成をめざした授業の構築に向け継続的な努力が必要とされる。

能　力	態　度
問題解決能力	自然や社会事象に対する関心・意欲・態度
数理的能力	主体的思考
情報処理能力	社会的態度
コミュニケーション能力	他人の信念・意見に対する寛容
環境を評価する能力	

（文部省『環境教育指導資料』より）

環境教育の指導を通して身に付けたい能力と態度

さらに，平成５年度から全面実施された学習指導要領がめざす「新しい学力観」では，社会の変化に主体的に対応できる能力や，自らの意欲をもとに自ら学習し判断し表現し行動できる資質の育成を重視し，“受動的”な学習形態から，生徒の“自発的”な学習形態への移行を求めている。中学校における環境教育は，こうした背景をも踏まえたものでなければならない。

日々の授業実践においては，ともすれば，与えられた知識の単なる記憶にとどまってしまったり，使い道のよくわからない技能の訓練に終わったりすることがある。環境教育が，もしそのような学習に陥ってしまうのであれば，地球環境問題の解決に役立つはずがない。環境教育では，まさしく「生きてはたらく力」「自己教育力」の育成をめざした学習が図られるべきである。そして，環境問題への対処や努力が，すべての人にとって，今後避けて通ることのできない課題である以上，学校教育の教科指導における環境教育は，いわゆる「生涯学習」の一環であるというだけでなく，その重要な“基礎的段階”と位置づけられてしかるべきである。

そこで本研究では，各教科の授業実践を通してどのような環境認識を育てていくべきか，また，「新しい学力観」を視野に入れつつ，環境教育の目標である能力や態度を育成するためには，どのような手だてが必要なのか，その具体的な方法論を明らかにしていくことをめざした。

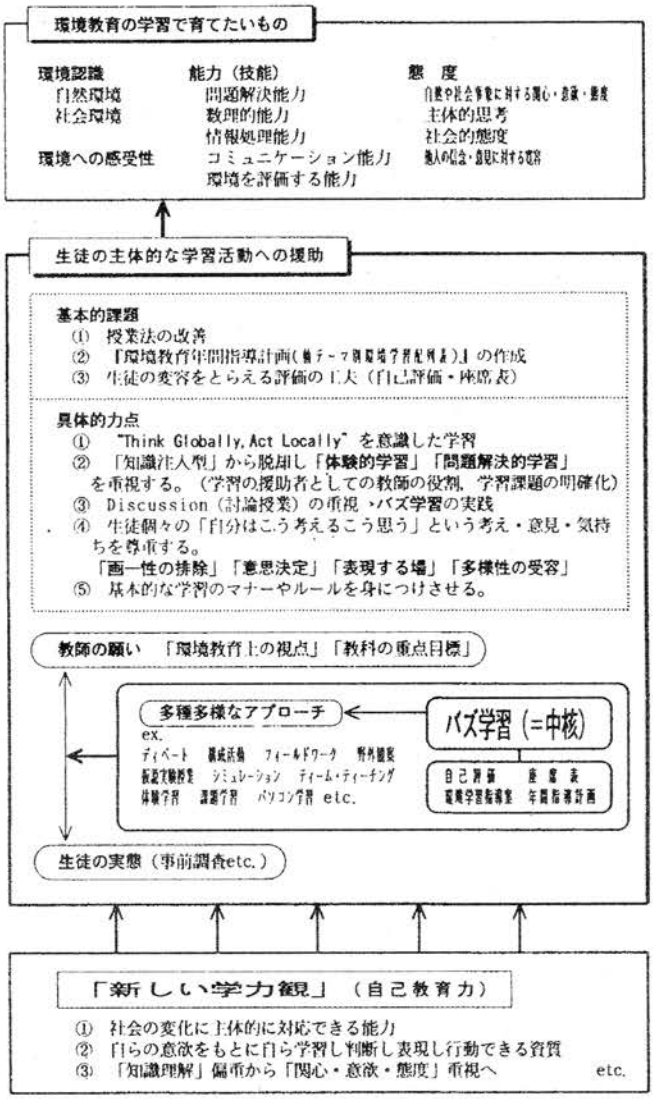
2　教科における環境教育の進め方（研究課題と研究内容）

(1) 授業法の改善

前項で述べたところの環境認識や能力・態度を育成し“生きてはたらく力”を身に付けさせるためには，様々な角度からのアプローチが必要である。

また，教科本来の特性や，教師の個性や持ち味，そして何よりも，学習者である生徒の実態を踏まえながら，**多種多様な学習活動**が用意されるべきである。

そこで本研究では，次の視点に立って授業方法の改善を試みた。



① "Think Globally, Act Locally" を意識した教材開発

生徒は，環境問題をとかく第三者的にとらえがちである。

そこで，どの授業においても，取り上げる環境問題を生徒の毎日の生活まで“ぐっと”引き寄せるプロセスを大切にしていく。

また，身近な事象でありながらふだん何気なく見過ごしているものを環境学習の素材として扱い，環境に対する興味や関心を高める。

② 「知識注入型」から脱却し「体験的学習」「問題解決的学習」を重視する。

実験・調査（フィールドワーク等）・構成活動など，生徒が主体的に活動する「体験的学習」を積極的に取り入れるとともに，１時間の授業もしくは単元全体が問題解決的な学習の流れになるようにする。

③ Discussion（討論授業）を重視する。

ディベートなど，討論（話合い）の授業を大切にする。また，生徒が話合い活動（相互活動）に主体的に参加できるような“素地”づくりとして，ふだんからバズ学習（協同学習）を積極的に導入する。

④ **授業に対する積極的な姿勢を持たせるための啓発活動を，継続して行う。**

自分の意見を大きな声で発言することや，友達の意見をじっくり聞くことの大切さなど，学習者としての望ましい態度や基本的なルール・マナーを身に付けさせるための指導を随時行っていく。

⑤ **生徒個々の「自分はこう考える・こう思う」という考え・意見・気持ちを尊重する。**

- 環境問題は，多様な価値観を含んでおり，立場によって結論が異なるなど，価値対立的な側面を持っており，一つの正解といったものが必ずしもあるわけではない。この点を特に留意し，例えば，賛否両論を含んだ資料の提示やそれに基づく質疑討論を重視し，**生徒の思考が画一的にならないように**配慮していく。
- 生徒自身の「自分はこう考える・こう思う」という**「意思決定」**は，社会参加や行動を誘発し，学習が行動へと結びつく重要な要因となる。したがって，この「意思決定」をできる限り授業の中でさせていく。
- 生徒が学習の成就感・達成感を持つのは，教師や友達から認められた時である。そこで，生徒が調べたことや考えたことなど，学習の成果を**「表現する場」**を大切にする。さらに，**"多様性を認め合う"**という受容の精神を尊重していく。

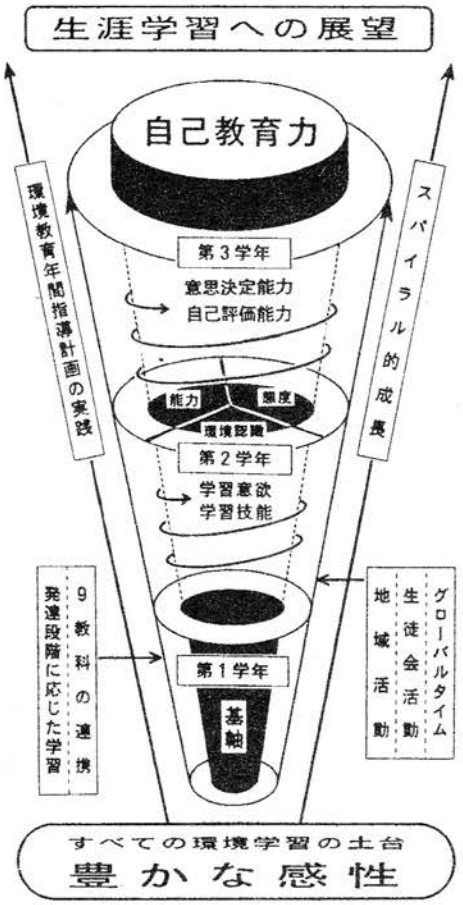
(2) **「環境教育年間指導計画」（軸テーマ別環境学習配列表）の作成**

教育課程に示された内容の中には，一見，環境教育とは無縁のように思えながら，視点を少し変えるだけで，環境教育の教材になるものが多く含まれている。また，生徒の実態を踏まえ，環境教育的視点からの「教師の願い」を付加した授業も必要である。このような観点から「環境教育年間指導計画」を作成した。これによって得られた効果として，主に次の２点が挙げられる。

① 各教科において，計画的かつ系統的に環境学習を配列したので，生徒の発達段階に応じた指導をすることが可能となった。

② 他教科の学習内容が一目で把握できるので，**教科間の連携**を図ることが可能となった。

同じ事象が重複して取り上げられる場合が生ずるが，教科によって"切り口"が異なるので，生徒は一つの事象を多面的にとらえ，環境認識や能力・態度がスパイラルに深まっていく。（右図参照）



《軸テーマ（教科の連携を図るためのキーワード）》

①住環境　②資源（森林を含む）とエネルギー　③水　④大気　⑤土　⑥食料

(3) 生徒の変容をとらえる評価の工夫

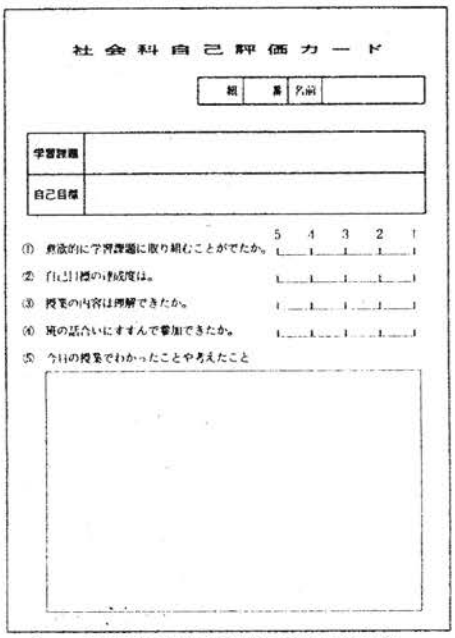
ア　自己評価の導入

生徒自身が学習活動を振り返り，目標への達成度を自ら評価して，今後の学習の改善を行っていこうとする「自己評価」（＝自己教育力における“自分を振り返る力”）を，積極的に取り入れた。

自己評価は，評価の主体が生徒であるので，関心意欲など，教師の目だけではとらえられない内面的な部分にせまることができ，教師側にとっても貴重な評価資料となる。また，生徒の達成度を把握できるので，個に応じた指導をする上でも有効である。

さらに，記述式を取り入れたのは，「ここまでできた（わかった）」「次はここまでできるようにしたい（調べたい）」という自己確認や自己目標（新たな課題）を意識化させるためである。

生徒の自己評価に対する教師の適切な助言や指導は，生徒の新たな学習意欲や工夫を引き出すことを可能にする。


社会科自己評価カード

組	番	名前	

学習課題	
自己目標	

5　4　3　2　1

① 意欲的に学習課題に取り組むことができたか。

② 自己目標の到達度は。

③ 授業の内容は理解できたか。

④ 班の話合いにすすんで参加できたか。

⑤ 今日の授業でわかったことや考えたこと

社会科における自己評価表の例

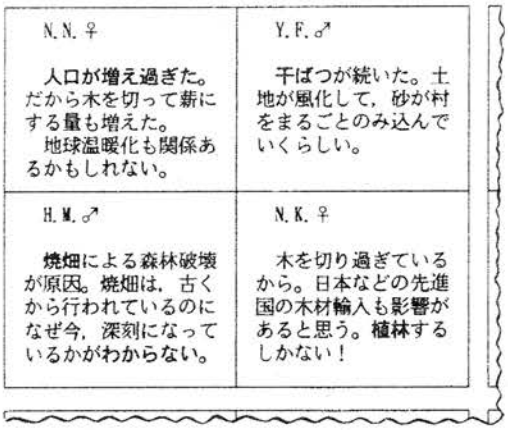
《本校における自己評価導入に関する共通理解事項》

- 主として**「自己評価表」**が用いられるが，その形式は**教師の独自性**を重んじる。
- ○×式の評価だけでなく，記述式を取り入れる。
- 「ここまでできた（わかった）」「次はここまでできるようにしたい（調べたい）」という**自己確認**や**自己目標**（新たな課題）を意識化させ得るものにする。
- 生徒によって評価の基準が異なり，過大評価や過小評価に陥りがちであるので，自己評価に対する教師の助言等により，生徒の自己評価の能力を高めていくプロセスも大切にする。
- 相互評価も場合に応じて取り入れる。相互評価は，自己評価と同様に評価の主体が生徒であるが，自己評価より客観性がある。

イ　座席表の活用

生徒一人一人のデータ（「事前アンケート」「前時の生徒の感想」「本時までに生徒が調べたこと」など）をつぶさに座席表に記入し，授業中の指名や，授業後の生徒の変容を把握するのに役立てた。

また，名前だけ書いてある座席表を用意し，バズ学習の“班の話合い”における生徒のつぶやきやユニークな発想などを「机間観察」でとらえて座席表にメモをし，それを全体での発表の際に活かすというオーソドックスな方法も随時取り入れた。



N.N.♀ 人口が増え過ぎた。だから木を切って薪にする量も増えた。 地球温暖化も関係あるかもしれない。	Y.F.♂ 干ばつが続いた。土地が風化して，砂が村をまるごとのみ込んでいくらしい。
H.M.♂ 焼畑による森林破壊が原因。焼畑は，古くから行われているのになぜ今，深刻になっているかがわからない。	N.K.♀ 木を切り過ぎているから。日本などの先進国の木材輸入も影響があると思う。植林するしかない！

予習課題の内容をまとめた座席表の例（一部）

3 各教科における実践

（1）国語科における実践

ア 重点目標

① 環境を扱った説明文や論説文において，筆者の意見を読み取り，そこに書いてある事実に対して，自分はどのようにとらえていくのか，常に自分の経験や生活とのかかわりで考えさせる。
② 文学作品の読み取りを通して，一人の人間としての「豊かな感受性」を養う。
③ 身の回りのことに対して「主体的にはたらきかける態度と能力」の育成を図る。

イ 授業実践例

学 年	第2学年	単元名	短歌・その心 （本時5／6）
ねらい	・ 短歌によって描かれた世界を読み味わわせる。（グループ研究・発表） ・ 季節感が失われつつあることに気づかせ，その原因について自分なりに考えさせる。		

本実践は，「豊かな感受性」を育成することに主眼を置いた授業実践の一つである。

短歌の鑑賞の単元ではあるが，単にその読み取りの域にとどまるのではなく，授業の後半部分で，発展課題として，日本人の中に失われつつあると言われる「季節感」について深く追究する場面を設定した。

四季折々の変化を感性豊かにとらえてきた“日本人の良さ”がなぜ今，失われつつあるのか。生徒は，野菜や果物等の具体物に五官を通して触れ，自分たちの生活を振り返りながら，思い思いに話し合った。

この実践を通して，生徒は自然を心豊かに見つめることの大切さに気づいた。

国語科では，この他，「主体的にはたらきかける能力や態度」を培うため，ディベートなどの討論の授業に力を入れて実践を重ねた。

リンゴと会話する生徒

教師の動き	生徒の動き	指導上の留意点
2首の短歌の内容をとらえよう。		
○ 前時の復習をする。 ○ 本時の学習課題を確認する。	○ 短歌の分類を思いだし，生き物を扱った短歌にも作者のいろいろな思いがあったことを思い出す。 ○ 本時に読み取る短歌を知る。	○ 一つ一つに作者の様々な思いがあることを思い出させる。 ○ 植物の登場する短歌のうち，季節を扱った2首を学習することを知らせる。
△ 季節を表している2首の短歌の内容について，班で発表してください。 △ 質問はありませんか。 ○ 詠まれた背景など，必要なことを補足する。	○ 担当班は，短歌の意味や鑑賞をプリントにそって発表する。 ○ わからないところは質問をする。 ○ 大切だと思うところはメモをとりながら聞く。	○ 表現技法があれば，それも確認させる。 ○ 静かに聞かせる。 ○ 情景をイメージ豊かにとらえさせたい。 短歌の意味を理解し，作者の気持ちを想像することができたか。（発表・観察）
2首の短歌から季節感について考えよう。		
▲ どんなときに季節（四季）を感じますか。 △ 全体の場で発表してください。	○ それぞれの季節感を班の中で発表し合う。 ○ 自由に発表する。 ・蝶が舞うのを見たとき ・クマ蝉のなき声を聞いたとき ・赤とんぼが飛んでいるとき ・木の葉が落ちるのを見たとき	○ 班の中で，お互いに感じたことを自由に発表させる。 ○ いつの季節かも確認させる。
△ それぞれの短歌の作者は，何に季節を感じたのでしょう。	○ 短歌にもどって考える。 ・蜜柑の香 ・鞭のごとくにひびき合う竹群	○ 作者の季節感に納得いくかどうかも考えさせる。
○ いくつかの植物（野菜や果物）を示し，いつの季節か考えさせる。 ○ テープの音（カエルの鳴き声）を聞き，いつの季節か考えさせる。	○ いつの季節に出てくる植物なのかを考えたり，匂いをかいだりしてみる。 ○ テープの音について考える。	○ 植物から受ける季節感が，今は稀薄になっていることに気づかせる。 ○ 教師の体験から，季節感を感じるものが減っていることを補足する。
▲ 季節感が失われつつある原因は何だと思いますか。	○ 班で話し合い，発表する。 ・季節のものが一年中食べられる。 ・自然が少なくなってきた。 ・生活が便利になりすぎた。	季節感が昔より感じられなくなっていることに気づき，原因を自分なりに考えることができたか。（発表）
自分なりの季節感を表す短歌を作ろう。		
△ 木下利玄の短歌をまねて，自分が季節を感じることがらを短歌にしてみよう。 ○ 次時の予告をする。	○ 春夏秋冬から一つ選び，短歌を作る。 ○ 残りの短歌について読み取ることを知る。	○ 時間がなければ家での作業とする。 ○ 時間があれば，いくつか紹介し，評価をする。 自分なりの季節感を短歌に表せたか。（プリント）

《生徒作品》

雪とけて ひょっこり出てきたふきのとう 太陽かがやく 春がまた来る　K.A.

風鈴の チリンと震えた 音がして うちわをあおぐ 夏がまた来る　Y.I.

八百屋には 値段の高い マツタケの 香りただよう 秋がまた来る　T.S

並木道 一人静かに 歩いても 落ち葉の音がし 秋がまた来る　E.K

（2）社会科における実践

ア 重点目標

① 人類すべてが「宇宙船地球号」の乗組員であり，「一人一人がその責任ある操縦者なのだ」という“地球市民としての主権者意識”を育てる。
② 自ら課題を発見し，その解決に向けて自ら情報を収集して処理をし，その結果生まれた“自分の考え”を自らの言葉で表現できる生徒を育てる。（＝選択教科「社会科」のフィールドワーク等）

イ 授業実践例

学　年	第3学年	単元名	原子力発電について考えよう！（独立単元4時間完了）
ねらい	① エネルギーと環境にかかわるグローバルな問題を，身近な視点からとらえさせ，主体的なかかわりを持とうとする姿勢を育てる。 ② 原発の是非を問うディベートを通して，情報処理能力・自己表現力・意思決定力などを高める。		

第1時では，先進国と発展途上国とのエネルギー消費量の格差を学習した後，追究の窓口を「電気エネルギー」に焦点化し，発電に必要な資源の可採年数を予測させた。生徒の中には“資源の有限性”をかんがみて「日常生活を問い直そう」とする意識がめばえ始めた。

第2時では，水力・火力・原子力発電のしくみとそれぞれの長所・短所を調べた。豊かな生活の裏側には，大規模な環境破壊や放射能汚染の危険性があることを知った生徒は「エネルギー確保のあるべき姿について真剣に考えなければ……」と，問題意識が高まっていった。

そこで，生徒にとっては全く新しい討論形式である“ディベート”を第3時に取り入れた。

ディベーターの論調は堂々としており，ディベートの論戦は白熱した。これは，これまでの学習の積み上げからの自信に裏打ちされていたからであろう。聞き手の生徒も真剣な表情でディベーターを見つめ，その発言をメモしていた。

ディベート後の感想の発表では「1時間の中で何度も自分の考えが肯定・否定の間でゆれ動いた」「聞いているだけでもこちらが興奮して胸がドキドキしてきた」などの意見が出され，生

時	授業展開	留意点・資料
(1)	私たちは，エネルギーをどのくらい消費しているのだろう ○ 生徒個々の家庭調査データをもとに，エネルギー消費量を概観する。 ○ 日常生活においてとりわけ電気の役割が大きいことを知る。 ○ 日本の電力消費量を他国と比較する。 私たちは電力をどうやってまかなっているのだろう ○ それぞれの発電に必要な資源を調べ，その埋蔵量から可採年数をシミュレートする。 ○ 今後どの発電方法の割合が増えていくか予想する。	電力カード「原油加熱換算式」（長野県電力センター「わたしたちの電気」参照） ・ 日々の生活はエネルギーの消費の上に成り立っていることをおさえる。 VTR「夜の地球」 TV グラフ「発電の電力消費量」 電力カード「埋蔵量と可採年数の対応表」（長野県電力センター「エネルギーの問題」）
予習課題	水力・火力・原子力発電のしくみと問題点を調べよう	
(2)	3つの発電のしくみと問題点について調べたことを発表しよう ○ 発電方法についてまとめる。 ○ 原子力発電所についてビデオ視聴する。 ○ 問題点についてまとめる。 ◎ 次時においてディベートをすることを知る。	プリント「発電のしくみ」 VTR「原子力発電のしくみ」 オイルショック・湾岸戦争 酸性雨・地球温暖化 チェルノブイリ事故
予習課題	原子力発電は本当に必要か（日本の電力は年度どのようにまかなっていくべきかという観点から考える）	
時間外	ディベートの役割分担をする	ディベーター＝8人（肯定側4人，否定側4人） ジャッジ（審査員）＝5人　タイマー＝1人 モデレーター（司会者）は教師が行うことにする。
(3)	原子力発電についてディベートしよう！ ○ 論題を確認する。「原子力発電は必要である」 ○ 進行表を中心にルールを確認する。 ○ 審査の方法を確認する。 ◎ ディベートを始める。 肯定側「立論」 4分 否定側「立論」 4分 作戦タイム 1分 否定側「反対尋問」 3分 肯定側「反対尋問」 3分 作戦タイム 1分 否定側「反対尋問」 3分 肯定側「反対尋問」 3分 作戦タイム 1分 否定側「最終弁論」 2分 肯定側「最終弁論」 2分 ○ 審判団が協議している間，聞き手が感想を述べ合う。 ・ どちらの立論も論点に筋が通っていて説得力があった。 ・ あの場面は僕なら次のように答えただろう。「……」 ・ 最初は賛成側だったが反対側になった。（その逆） ○ 審判員が判定を発表する。 ○ 教師による講評を聞く。 ◎ 自分の主張（意見文）をワークシートに書く。	司会 タイマー 否定側 肯定側 審判 聞き手 ・ 会場設定は授業前に済ませておく。 ・ 方法については学級全体に指導しておく。 ・ 時間を厳守させる。 ・ 作戦タイムでは，聞き手からもディベーターへアドバイスをさせる。 ・ 教師は，ディベーターに助言を与えない。 ・ 審査員にはメモをとらせる。 ・ 感情的にならないようにさせる。 ・ 終了後，審判員の協議を聴ドでさせる。 ・ ディベートを聞いて，自分の意見がどのように変化したかなど，率直に感想を発表させる。 ・ 労いの言葉をかける。 ・ 全員に書かせる。
(4)	エネルギー資源と環境の問題をグローバルな視点から考えよう ・ 原子力発電所で事故が起こると，一つの国の問題ではなく地球規模の災害になるんだ。 ・ 省エネルギーは，地球人として守るべきマナーなんだ。 今，私たちがやらなくてはならないことは何だろう	・ スイスやスウェーデンの例を中心に原発に対する諸外国の例を紹介する ・ グローバルな環境問題であることに気づかせる プリント「六ケ所村」 ・ 実生活に則して考えさせる。

徒の参加度の高さを表している。ほとんど生徒の手だけによって進められた１時間であった。

第４時では，ディベートの中で指摘されたエネルギーと環境にかかわる問題点について整理した後「今，私たちがやらなくてはならないことはなんだろう」というテーマで話し合った。

本実践では，種々の資料に基づいて基本的な事実認識を深める中で，生徒は次第に課題意識を醸成することができた。ディベートでは，生徒の課題解決への意欲化を図るとともに，生徒自ら資料収集に基づく討論を通して，自分の考えをより明確に持つことができ，意思決定能力を高めることができた。ディベートの最終弁論では，賛否ともに生徒自身の今後の実践や行動にも言及していたことが印象的である。

否定側「反対尋問」

肯定側「立論」

（３）数学科における実践

ア　重点目標

① 単元の導入段階や終了後に，課題学習の教材として“環境に関すること”を取り入れ実践する。
② 社会現象や自然現象を数理的に処理し考察する能力を高め，それを生活に応用する態度を育てる。

イ　授業実践例

学　年	第２学年	単元名	図形と相似　～縮図の利用～　（本時　15／18）
ねらい	地球の周の長さや，地球を半径１ｍの球と考えた時のオゾン層の幅を計算する学習を通して，地球環境に関心を持たせ，課題に対して積極的に取り組む姿勢を育てる。		

本実践では，「縮図を利用して実際に測れないものを測る」という学習の応用として，地球の半径を１ｍとした場合のオゾン層の幅を計算させた。0.63cmという数字から，どの生徒も「オゾン層は，本当に薄くて壊れやすい層なんだ」等の感想を持ち，数理的にオゾン層の実態をイメージ化した。

数学では，この他に二酸化炭素濃度の経年変化を一次関数として立式する学習など，自然の中の数学的な原理や法則を追究する授業実践を行った。

「オゾン層の幅を計算しなさい」

教師の動き	生徒の動き	指導上の留意点
地球の周を計算しよう。		
△ 地球が球である証拠は何ですか。	○ 班で話し合う。 ・船が水平線に消えるときトの方から見えなくなっていく。 ・月食。	○ 歴史上のことがらにもふれながら説明する。
プリント・電卓を配る。		
△ 地球の周を計算しましょう。	○ プリントで，地球の周を計算する。	○ 平行線の性質を利用することを助言する。
○ 都元紙筆を知らせる。 20		
○ 指名し，確認する。	○ 発表する。	地球の周を計算することができたか。（ｐ１ｈ）
△ 地球の周から半径を求めましょう。	○ 地球の半径を計算する。	○ 時間に余裕があれば，地球の自転速度，公転速度などを計算させる。
オゾン層の幅を計算しよう。		
△ オゾン層がどこにあるか知っていますか。 ▲ 地球を半径１ｍの球と考え，オゾン層の幅を計算しましょう。 15	○ 発表する。 ・成層圏 ○ 個人で計算する。	○ 対流圏についてもふれておく。 ○ オゾン層が薄い層であることに気づかせる。
○ 対流圏の幅も計算させる。	○ 発表する。 ・オゾン層40km　0.63cm （対流圏10km　0.16cm）	課題に対し真剣に取り組んでいるか。（机間観察）
△ オゾン層にはどんな役割がありますか。	○ 知っていることを発表する。 ・動物や植物にとって有害な紫外線を吸収する。	
△ オゾン層破壊の原因を知っていますか。	○ 知っていることを発表する。 ・フロンガス	○ オゾン層がフロンガスなどによって急激に破壊されている現状を知らせる。
△ オゾン層が減少するとどんな影響がありますか。	○ 知っていることを発表する。 ・皮膚がん，白内障の増加。 ・老化が進む。 ・植物の成長に影響がでる。	○ このままでは自分たちの将来が危ないことを認識させる。
○ 資料を読ませる。 15		
△ オゾン層が破壊されている現状についてどう思いますか。	○ 自分の考えをプリントにまとめる。	オゾン層を守ることは地球上の生物にとって重要な問題であることが分かったか。（ｐ１ｈ）

（4）理科における実践

ア　重点目標

① 自然環境とその仕組みについての自然科学的な知的基盤を育成する。
② 自然やその変化に対する感受性を養うことや，問題解決に向けて主体的に取り組む態度，さらに環境を保全し環境に対して責任ある行動がとれる態度を育てる。そのために，観察・実験・野外観察・環境調査・課題研究など，自然についての直接体験を重視する。

イ　授業実践例

学　年	第3学年	分　野	選択教科「理科」
ねらい	地域の環境調査を中心に，課題研究や野外調査などの学習をすすめ，直接体験活動を通して，種々の技能を身に付けさせるとともに，“地域の環境を見つめる場”とする。		

新学習指導要領の一大方針である「自己教育力」の概念は，その言語使用の頻繁さに比べ，実践を導くのに十分なまでに深められているとは必ずしも言えないが，少なくともその根底には，「自己の創造＝個性化」の考え方が流れている。選択教科が近年とみに重視されてきているのは，個を大切にする学習が実現できることと併せて，「自ら学ぶ意欲と社会の変化に対応できる能力」を育成し得るカリキュラムを，地域性や学校の独自性を加味しながら編成できるからである。

本校においては，本年度から選択教科「理科」が開設され，身近な地域の教材や環境問題に焦点をあてながら，生徒が主体的に活動し，調査や研究をすすめる取組を行っている。

所属生徒41名が，2～4名から成るグループ(13班)に分かれ，テーマを決めて研究を進めていった。

9月に1学期の研究内容を発表する会を開いた。このような「表現する場」が学習意欲を高めることは言うまでもない。

各班のテーマ

1班	内津川の水質調査をしよう
2班	廃油を使って石けんをつくろう
3班	ペットボトルと入浴剤を使って，ロケットを飛ばそう
4班	酸性雨の調査と生物への影響を調べよう
5班	校内のタンポポマップをつくろう
6班	地蔵川の水質調査をしよう
7班	校区内のホタルマップをくつろう
8班	校内の樹木マップをつくろう
9班	校区内のタンポポマップをつくろう
10班	酸性雨の調査と生物への影響を調べよう
11班	内津川の水質調査をしよう
12班	内津川の水質調査をしよう
13班	ソーラーカーをつくろう

各班の実践内容例

内津川の水質調査をしよう（1・11・12班）

各班ごとに調査するポイントを決め，授業時間内に自転車でポイントへ移動して，調査を進めた。主な調査項目は「水の濁り」「水温」「COD（化学的酸素消費量）」「NO_2（亜硝酸）」「PH」である。COD・NO_2 については，パックテストで調査を実施した。また，併せて水生生物の調査も行い，総合的に内津川の汚染度や原因を考察した。

校区内のホタルマップをつくろう（7班）

全校生徒を対象としたアンケートをもとに，過去5年間にホタル（ヒメホタル）を見た場所や今年ホタルを見た場所を調査し，校区の地図にまとめた。また，春日井市の研究資料をもとに，昭和24年・54年のホタル分布を比較したり，ホタルの種類や生態を研究した。校区内では，約8カ所でホタルが生息していることがわかった。調査の内容は学校祭でも展示した。

校区内のタンポポマップをつくろう（9班）

在来種と外来種のタンポポによって，地域の都市化の状況が把握できることから，選択教科理科の第2・3時で，所属生徒全員で手分けをして，校区のタンポポ調査を実施した。この調査で，「シロバナタンポポ」が，校区内に2カ所生育していることもわかった。9班の生徒は，この調査を地図にまとめ，校区の都市化の状況を分析した。現段階でわかったことは，新しく土地を整備した地点（グランド・堤防・新興住宅街）に外来種が多いということである。また，本校の調査結果を春日井市の調査機関に送り春日井市全体との比較も行う予定である。

酸性雨の調査と生物への影響を調べよう（4・10班）

まず，本校での酸性雨の現状を調査した。4月・5月の調査では，PH4.0～6.4の酸性雨が降っていることがわかった。さらに，植物への影響を考察するために，スギ科の植物とアサガオに，PH7（中性）・PH4（本校での最高値）・PH2（実際にヨーロッパで降っている雨）の水を与えながら育てていった。PH7と4で育てたアサガオは，ほとんど変化なく育っていったが，花が開化したところでPH4の花の色素がとれるという実験結果が出た。スギ科の植物も，はじめはPH7と4で大差はなかったが，2カ月後からPH4のスギの生育が悪くなっていった。

この実験は理科室で行っているので，実験をしている生徒だけでなく，理科室を利用する多数の生徒が興味深く観察を見守った。

酸性雨の実験（10班）

研究発表会の様子

（5）英語科における実践

ア　重点目標

① ＡＥＴとのTeam Teaching を通して言語運用能力や意欲を高め，異文化理解・国際理解を深める。
② 地球規模の環境問題にかかわる内容を教材に取り上げ，適切な資料の収集や効果的な利用を行う。
③ カナダの姉妹校との連携を深め，情報を交換し合い，日常の実践を通してお互いが身近な問題として環境問題をとらえていく。

イ　授業実践例

学　年	第２学年	単元名	「Lesson８　Niagara Falls 」　（本時　５／６）
ねらい	ナイアガラの滝の雄大さを実感させるとともに，ＡＥＴとのTeam Teaching によって，環境問題への理解・関心を高める。		

形容詞の比較級と最上級を学ぶ本単元において，本時は文型の学習を一通り終えた後の，復習の１時間における実践である。授業は，終始一貫してＡＥＴのStacey先生とのTeam Teaching によってすすめた。

まず，Stacey先生がナイアガラの滝へ行った時の感動を伝える場面から授業は始まり，そのナイアガラの滝のイメージ化を図るために，ＬＤ視聴へとつなげていった。この学習過程は，ただ単に基本文型を習得させるだけでなく，「ナイアガラの滝の雄大さと美しさ」を知らせたいという授業者の環境に対する特別な“思い”から，意図的に組み入れたものである。

さらに授業は，Stacey先生が，ナイアガラの滝の美しさとは対象的であるアメリカ北部地帯の「酸性雨」の実態について，２年生の語学レベルで解説するところで山場をむかえた。生徒は，Stacey先生の話を食い入るように聞いていた。ヒアリングの練習も兼ねて実施した酸性雨についての聞き取りクイズ（発生から被害にいたるまでの順序を並べかえる）にも，生徒は意欲的に取り組んだ。

とかく「英語科においては環境学習の授業化は難しい」と言われるが，日々の授業実践の中の，「聞く」「話す」「読む」「書く」の４つの言語活動におけるコミュニケーション能力の育成は，もうすでに環境教育との接点と言える。

さらに，国際理解教育の基礎を培うという観点から考えると，例えば，地球規模の環境問題を扱ったり，外国の生活様式との違いを比較する素材（本校では，ごみ処理の違いについて日本とカナダを比較した実践がある）を取り上げ，それを環境学習への“切り口”にすれば，教材化はそれほど難しくない。

その際，ＡＥＴとのTeam Teaching の導入は，生徒の学習効率と意欲化を高めるのに，かなりの効果があることは論ずるまでもない。

ＡＥＴの Stacey 先生の話

Stacey先生の経験談

I am from Victoria, B,C, Canada. I lived in Ottawa. I went to Niagara Falls many times. When I went to Niagara Falls, I was very surprised. They are very very very big. We feel very small at the Niagara Falls.
We can see very beautiful Niagara Falls from the boat.
There's a lot of water. We cannot hear our voices. We get wet. Many people go to Niagara Falls.
Niagara Falls look like Mecca for honeymooners.

酸性雨についての話

In the State of New York there were a lot of fish, but now there aren't many fish. Because there is acid rain. In Detroit, Chicago and the northern part of America there are many factories. Factories and cars make gases. And the gases go into the sky. Gases go far away with the wind. They come down with the rain. We call it acid rain. The acid rain kills fish and trees. Acid rain is a big problem in Canada, Germany, Sweden, and all over the world. In the 21st century, what will we see and hear at the lakes?
Will fish be there? Will birds sing again?
Or will it be A SILENT SPRING ? What can we do? Is it too late? No. We can stop acid rain if we work together.

聞き取りクイズ

次の文を酸性雨の発生から被害にいたるまでの順序に並べ替えなさい。

ア Factories and cars make gases, and they go into the sky.
イ The gases come down with the rain. We call it acid rain.
ウ The acid rain kills fish and trees.
エ The gases go far away with the wind.

ＡＥＴとの Team Teaching

（6）音楽科における実践

ア　重点目標

① 音楽鑑賞や表現活動を通して，芸術を愛好する心情と感受性を育て，豊かな情操を養う。
② 生活の中にあふれる「音」「音楽」から日常生活を見つめ直し，より潤いのある生活空間を見いだそうとする態度や，よりよく自分を導こうとする心情を育成する。

イ　授業実践例

学　年	第3学年	単元名	モルダウ　連作交響詩「わが祖国」より　（本時　1／2）
ねらい	① 標題の表す内容を，スメタナはどのような思いをこめて音楽にしたのかを考えさせる。 ② チェコの歴史背景・社会情勢が音楽にどのような影響を及ぼしたのかを考えさせる。		

音楽鑑賞の実践である。交響曲と交響詩の違いについて前時で学習しているが，本時では，その発展課題として，標題音楽である「モルダウ」を鑑賞の素材に用いて，作曲者スメタナの意図や当時の時代背景などを深く掘りさげていく学習を展開した。時代や情景のイメージ化と生徒の興味関心を高めるために，ＶＴＲ（『名曲アルバム』）やチェコの歴史について書かれた資料プリント等を活用した。

鑑賞時の生徒の表情は真剣そのものであり，鑑賞後の話合いでは核心をつく意見が多く出された。また，授業のまとめの段階で書かせた生徒の感想はどれも充実しており，生徒が「モルダウ」という曲にいかに奥深くまで入り込んでいったかを物語っている。

音楽科では“鑑賞”を「単に美しい音楽を聴く」というレベルにとどめるのではなく，「音楽を通して自分の気持ちや考えを表す」という，いわゆる“表現”へつなげたいと考え，授業実践を積み上げてきた。

生徒の感想

スメタナは，今までずっとチェコが苦しい思いをしてきたことや平和の大切さを世界の人々に訴えたかったと思う。「モルダウ」の最後のすごい迫力の部分は“苦しみもいつかは喜びに変わる”ということを表していると思う。　R. K.

スメタナは，音楽を通して民族の独立運動に参加した。オーストリアの支配下にあった苦しみや悲しみを音楽に表現した。そして，チェコの良さを自己主張し，「どこにも支配されない」という気持ちを知ってもらうために，この曲をつくったと思う。　T. K.

「モルダウの川が堂々と流れる＝チェコ人も堂々と生きる」みたいな感じがした。曲の暗い部分では，スメタナの心の苦しみを感じた。耳が聞こえない以上に，オーストリアの支配下にあるということのほうが辛かったと思う。　M. Y.

鑑賞後に「自分の思い」をつづる

教師の動き	生徒の動き	指導上の留意点
交響曲と交響詩の違いを確認しよう。		
△ 交響曲と交響詩の違いについて，プリントにまとめてください。 ○ 国民楽派についても補足説明を入れる。 △ 標題音楽である「モルダウ」は何を訴えているのでしょう。	○ プリントの空欄部分を記入しながら前時の学習内容を確認する。 5 ○ 絶対音楽と標題音楽の違いを知る。 ○ 本時の学習内容を知る。	○ 曲の構成面を追求した絶対音楽と標題の内容を重視した標題音楽との違いを強調する。 交響曲と交響詩の違いを理解しているか。（ワークシート）
標題の内容を音楽で表すことによって，スメタナは何を伝えたかったのだろう。		
△ ビデオを見て，モルダウ川の様子をつかみましょう。 ○ 標題「月の光」～「堂々と流れる」の部分の映像を提示する。 △ ビデオを見て，気づいたことやわかったことを発表してください。 18 ○ 発表内容を板書する。 △ なぜ川の様子を細かく描き出したのでしょう。 ○ 作曲当時聴力がほとんどなかったことや国民音楽祭では必ず演奏される曲であることを知らせる。 ○ 発表内容を板書する。 △ スメタナは単に川の流れの様子だけを表したかったのでしょうか。	○ 映像の合間に現れる説明をたよりにモルダウ川の様子を知る。 ○ 自由に発表する。 ・ 豪華な建物がある。 ・ 自然が豊かだ。 ・ スメタナは耳が聞こえなかった。 ○ 個人で考える。 ○ 自由に発表する。 ・ 自然の様子を人々に知らせたい。 ・ チェコの生活を知らせたい。 ・ スメタナの気持ちを表している。 ・ 平和を願っている。 ○ 作曲当時のチェコの情勢について説明を聞く。	○ 映像の中で標題の内容が省略されている部分をあらかじめ説明しておく。 ○ プリントのメモ欄に気づいた点を書き加えながら聴かせる。 ○ 映像の中に出てきた説明の部分を再度確認させる。 ○ 映像で省略されていた部分の標題についても考えさせる。 音楽の表す標題の内容について自分なりの考えを持つことができたか。（発表） ○ オーストリアの支配の様子や民族紛争の様子も併せて考えさせたい。
スメタナは「モルダウ」という曲で人々に何を伝えたかったのだろう。		
▲ モルダウを全曲聴いてスメタナが人々に伝えたかったことを考えましょう。 17 ○ 「モルダウ」を全曲聴かせる。	○ 曲を聴きながら，スメタナが「モルダウ」の中で人々に訴えたかったことについて，自分の考えをプリントに書く。 ・ 誇り高きこの川の流れを忘れないでほしい。 ・ 川の流れはチェコの歴史を表しているのではないか。	スメタナのモルダウ作曲の意図について自分なりの考えを持つことができたか。（ワークシート）
○ 本時のまとめをし，次時の予告をする。 5	○ プリントを提出する。 ○ 次時は実技テストがあることを知る。	○ アルトリコーダーのテストについて連絡する。

（7）美術科における実践

ア 重点目標

美術教育は，造形活動を通して子どもの独自な感性を伸長させ，そのことによって，情操豊かな人間を育てることを目標としている。本研究ではさらに，生活環境自体を改善していく力や態度を育てることが重要であると考え，デザインの分野での指導を中心に実践を行った。

第1学年
身の回りの環境の美的改善について考えさせ，楽しい学校生活を送るために必要なデザインを考える。

第2学年
自然環境や地域社会の問題について考え，訴えたいことを表現する。

第3学年
人工物と自然物とのかかわりについて考え，自然や環境を大切にした調和のとれた造形物を考案する。

イ 授業実践例

学　年	第1学年	単元名	学校生活のデザイン（特別教室の表示板のマークをつくろう）
ねらい	① マークの種類や役割を理解し，形を象徴化したり抽象化したりする力を育てる。 ② 学校を，美しく楽しく快適な環境にするために，視覚伝達デザインが必要不可欠であることを感じとらせ，簡明で形が美しく印象深いマークをデザインさせる。		

《単元構成》

① 学校生活に必要な伝えるデザインの役割を考える。	2時間
② マークのアイデアスケッチをし，構想を練る。	3時間
③ 下書きをして，彩色をする。	2時間
④ レタリングの意味について学習し，基本的書体の練習をする。	3時間
⑤ 完成作品を相互鑑賞し合って感想を話し合い，代表作品を決定する。	1時間
☆ 代表作品を実際に製作し，各特別教室の表示板として使用する。	（1年間）

新聞や雑誌の中からマークを集める

生徒作品

学　年	第2学年	単元名	環境をみつめて（ポスター）
ねらい	① ポスターの目的・機能・必要条件を理解させ，訴えたい内容を整理し，印象深く斬新なポスターを考えさせたい。 ② 環境問題をポスターの題材にし，問題の原因を追究して，伝えたい事柄を整理する学習を通して，これからの生活と環境との関連について考えさせたい。		

《単元構成》

★ 美術室の掲示板に参考作品を掲示する。	4週間前
★ 指導内容を予告し，資料収集の指示をする。	2週間前
① 参考作品を鑑賞し，ポスターの機能・必要条件について考える。	1時間
② ポスターの基本的な要素についての基礎練習をする。	2時間
③ ラフスケッチで作品の構想を練る。（ビュアーの活用）	4時間
④ 練り上げた構想を下絵に描き，彩色計画に基づいて彩色する。	8時間
⑤ 作品を相互鑑賞し，ポスターの製作を通して学んだ点について話し合う。	1時間

環境に関する素材を探す

生徒作品

（8）保健体育科における実践

ア　重点目標

① 保健分野において，健康と環境とのかかわりについて理解させ，健康に適した環境の維持や改善を図ることができる能力を育てる。
② 単に知識の習得にとどまらず，生徒が現在及び将来の生活において健康や安全の問題に直面した場合に，正しい判断で適切に処理できる技能や態度を育てるため，地域や学校などの身近な環境についての体験的学習を導入する。

イ　授業実践例

学　年	第2学年	単元名	環境条件と健康　（本時　2／4「明るさ」）
ねらい	① 明るさと暗さへの適応を理解し，適切な明るさの条件を考えさせる。 ② 作業に応じて適切な明るさがあることを認識し，日常生活に生かす態度を育てる。		

明るさの条件について考察させる実践である。学校や家庭などで適切な明るさがないと，学習効率が落ちたり住居の快適性が失われる。また，視力障害や疲労感などの影響が出る。

授業は，「適度な明るさとは」「採光と照明はどうあるべきか」について生徒自身が自らの生活と関連付けながら追究していった。とりわけ，「照度計」を用いて教室の廊下側・中央・窓側のルクスを測定する体験的学習は，生徒の思考に大きなインパクトを与えた。

本実践によって，生徒は，身の回りの住環境が，自分自身のちょっとした"心くばりと工夫"によって改善されること，そしてその住環境の改善が，実は健康の増進に非常に大きく寄与することを認識し，「生活を見直そう」という意識がめばえたことは，実践の成果である。

明順応と暗順応について調べよう。

★ 明るさへの順応について体験する。（タオルを目に巻き１分間その状態を保つ）
① タオルを取った直後の感覚を発表する。（まぶしい，字が読めない…）
② まぶしさや暗さを感じた経験を話し合う。（太陽，車のヘッドライト，映画館…）
③ 明順応と暗順応について補足説明を聞き，プリントにまとめる。

適度な明るさについて調べよう。

① 明るさや暗さが目に影響を及ぼす時について話し合う。（ぼくがテレビを見る，電い（ぼ）で作業する…）
★ 「照度計」で教室の照度を測定する。（廊下側・中央・窓際）
② 照度基準を知る。（教科書）
③ 照度基準と測定結果を比較する。

適切な採光と照明について考えよう。

① 採光と照明の在り方について話し合い，まとめる。（直射日光はよくないよう，蛍光灯が必要だ…）
② 授業でわかったことをまとめる。

生徒の感想

ふだんは，勉強したり本を読んだりしていても，あまり明るさについて気にしなかったけれど，これからは，局部照明を取り入れようと思う。　H. S.

晴れの日と雨の日で，カーテンの開け閉めをこまめにやろうと思う。T. K.

今までこんなこと調べようとも思わなかったけれど，照度計の測定はけっこうおもしろかった。目を悪くしないように気をつけよう。　K. F.

今までは，明るければいいと思っていたが，明るすぎてもいけないということがわかった。　S. O.

照度を測る生徒

（9）技術・家庭科における実践

ア　重点目標

① 生活に根ざした教科として，環境問題の重要性に気づかせるとともに，教科で学習した環境にかかわる内容を具体的な生活場面で相互に関連付け，よりよい環境を築くための実践的態度の育成を図る。
② 授業実践においては，技術科では，木材加工・金属加工の領域で自然や資源とのかかわりを，電気ではエネルギーとのかかわりを考えさせる。また，家庭科では，消費者教育を通して，衣食住における実習などから環境の問題にせまりたい。

イ　授業実践例

学　年	第3学年	単元名	被　服　（本時　24/25「リフォーム」）
ねらい	① 自分の衣生活を見直すことにより，消費と省資源との関係を理解させる。 ② 古着の活用を通して，環境保全に対して積極的に参加する態度を養う。		

流行やデザインにとらわれて，安易に衣服を購入する傾向があるとされる中学生に，「リフォーム」の意義と方法を理解させ，衣生活改善にむけた積極的な態度を育成することをねらいとした実践である。

この学習を通して，生徒は，「リフォーム」が省資源・環境保全につながっていくことを認識した。

教師の動き	生徒の動き	指導上の留意点
資源回収された古着類のゆくえを調べよう。		
○ 地球資源回収活動の写真を見せる。 △ 写真の古着はどうなっていくのでしょうか。 ○ 古布についてのビデオを見せて，古着の再利用について説明する。	○ 自由に発言する。 ・燃やすか，どこかに埋める。 ・古着として売る。 ・貧まれない国へ送る。 ・別の布に作りかえる。	○ トラックに積まれた布の山に関心をもたせ，使い方を予想させる。 ○ 生徒が回収した古着は，古着専門業者によって100%再利用されていることを知らせる。
衣服のリサイクルについて話し合おう。		
△ 自分の家で行う古着のリサイクルにはどんなものがあるでしょう。 	○ 家で調べてきたことをプリントに書く。 ○ 班で話し合い発表する。 ・資源回収（廃品回収）に出す。 ・雑巾をつくる。 ・近所の人や親戚の人にあげる。 ・バザーに出す。 ・リフォームする。 ・古着店に売る。 ○ 家庭での衣服のリサイクルについての補足説明を聞く。	○ 友達の発表を聞くことにより，各家庭によって各種の方法がとられていることに気づかせる。 衣服のリサイクルの流れが理解できたか。（観察） ○ 古着のリサイクルが省資源につながることに気づかせたい。
自分にできるリフォームについて話し合おう。		
○ リフォームの作品例を提示する。 ▲ いらなくなった服から自分の技術でできるリフォームを考えてみよう。 △ この古着から何ができますか。 	○ 各班に配布された古着の見本を観察し，プリントに記入する。 ・素材　・色　・付属品の有無 ○ 古着とプリントの絵を見ながら考える。 ・クッション　・小物入れ　・ウィールまくらカバー ○ どの部分をリフォームするか図示する。 	○ 「取扱い絵表示」や「品質表示」を読み取らせる。 ○ これまで学習してきた縫製技術でできる方法を考えさせる。 ○ 家で，自分や家族が使用できる物になるよう助言する。 ○ 他の布や付属品を補足してリフォームすることをおさえる。
△ 考えたリフォームを班内で発表しましょう。 ○ 2～3の作品を取り上げ，クラス全体に紹介する。 	○ 自分の描いた図を見せ合い，発表し合う。 ○ 型や素材が実現可能か話し合う。 ○ 感想を発表する。 ・おもしろい形だ。 ・ファスナーやボタンを利用している。 ・私の服ならもっと気にいった。	○ 友達のリフォームを見て，自分の作品の構想を膨らませるようにさせる。 自分なりの構想図を描き，それをもとに班の話合いに積極的に参加しているか。（作品・机間観察）
	○ プリントに感想を書き，自己評価をする。	○ 次時は，被服の適切な選び方について学習することを告げる。

4 今後の課題

(1) 「新しい学力観」に基づいた授業法の改善では，野外観察，ディベート，ティーム・ティーチング，パソコン学習など，教科の特徴を生かしながら様々な試みにチャレンジしてきた。今後は，学習形態と学習意欲とのかかわり，学習形態と育成される能力や態度との相関関係について，さらに検証を重ねていき，「自己教育力」の概念をより具体化していきたい。

(2) 「環境教育年間指導計画（軸テーマ別環境学習配列表）」の作成により，発達段階に応じた指導と各教科の連携を図ることができた。しかし，「環境認識の育成」という知識理解的な部分に力点が偏ってしまったようにも思われる。「豊かな感性」を育成するために，地域の特性を活かした教材の開発や，生徒が五官を通して「環境」にせまる学習活動の構築に向け，さらに研究を深めたい。

(3) 生徒の変容をとらえる工夫としての「自己評価の導入」と「座席表の活用」は，有効であった。今後は，生徒が自ら課題を見つけて学習に取り組み，自らそれを振り返り，さらに新しい課題を自ら作り出していくという学習の流れを具現化するために，教師が行うべき“援助の在り方”についてさらに追究していきたい。

Ⅳ　道徳における環境教育

1　研究目標

自然界の一員として自然を愛し，生命に対する畏敬の念を高め，より良い環境づくりに主体的にかかわることのできる実践的な行動力を育成する。環境倫理に裏付けられた人間としての在り方や生き方についての自覚を深めさせる。

2　研究目標設定の理由

道徳教育は環境教育に直接つながる重要な位置を占める。環境教育の基盤である環境倫理に裏付けられた人間の育成を図る上で道徳教育の果たす役割は大きい。各教科や特別活動における知識・理解・実践力の根底には温かく思いやりのあるやさしい心が不可欠である。

私たちは，今日様々な価値観の中で揺れ動く生徒に対し，人として本来あるべき姿や進むべき道筋を共に考えていきたい。また，宇宙船地球号の一員として，まず自分にできること，正しいと思うことを実践しようとする強い意志を育成していきたい。『人にも地球にもやさしく』という言葉は生徒たちにとって将来にわたり心の支えとなり指針となるはずである。

3　研究内容

(1) 環境教育との関連について

文部省の『環境教育指導資料』は道徳教育に求められるものを次のように示している。

> 人間が本来備えているよりよく生きたいという願いに根ざしながら，社会にあって公共の福祉に貢献しようと努め，進んで平和的な国際社会に貢献できる主体性のある日本人を育成するため，その基盤としての道徳性を養う。自然を愛し，生命に対する畏敬の念を高め，環境や環境問題に対して責任ある行動がとれる態度を育成するとともに，よりよい環境づくりに主体的にかかわることのできる実践的な行動力を養う。この際，環境倫理に裏付けられた人間としての在り方生き方についての自覚を深めることが必要である。

さらに，道徳教育は学校の教育活動全体を通して行なうこととし，次の４つの視点を挙げている。

① 自然との触れ合い　② 生命の尊重　③ 勤労と社会奉仕　④ 国際社会への貢献

また，本校は昭和62年度以来，国際理解教育を推進する過程で，次の３つを重点目標として各教科・道徳・特別活動に取り組んできている。

① 人間尊重の心の育成　② 自国や他国の文化を理解し尊重する心の育成
③ 平和を愛する心の育成

そこで，中学校学習指導要領に示された22項目を検討し，項目相互の関連や環境教育全体との関連を考え，本校独自の『環境関連６項目』を設定し，道徳教育年間指導計画を作成した。

南城中学校道徳教育における環境関連６項目（数字は年間計画表と対応する）	学年別重点目標
(1) 自然や動植物を愛し，自然環境を大切にする。 (2) 自他の生命を尊重する。	第１学年 (1) (2)
(3) 節度のある生活をする。 (4) すべての人に親切にし，すべてのものに思いやりを持つ。	第２学年 (3) (4)
(5) 勤労の尊さと社会奉仕の気持ちを持つ。 (6) 郷土愛を持ち，世界の平和に貢献する。	第３学年 (5) (6)

(2) 年間指導計画の立案

前記の環境関連6項目の視点に立ち，教育課程の見直しを行ない，「主題とねらい」「環境教育の視点」「6項目とのかかわり」を表した年間指導計画を作成した。

(3) 授業実践例

主題名	「使い捨ての風潮」　関連項目 (3) (4)
資料名	「紙おしめと布おむつ」

布おむつと紙おむつを比べる生徒

ア　主題設定の理由とねらい

自然環境を大切にしなければならないことは頭ではわかっていても，「自分一人ぐらい」とか，便利さ・快適さに慣れた私たちは「使い捨て」ということに無神経になっているのではないか。私たちの回りにある様々な『使い捨て』を今一度見直す必要がある。紙おむつと布おむつ，割り箸，使い捨てカメラ等の問題をシリーズとして取り上げ，自然環境に対する思いやりの気持ちを育てたい。

イ　学習過程における生徒の様子

導入段階で「紙おむつを使うことに賛成か反対か」と尋ねたところ，賛成23名，反対16名であった。

展開段階で資料プリントを配布し，1989年のデータを示した。消費枚数41億9千万枚，消費重量で21万トン。材料のパルプは，立ち木に換算すると252万本。古紙使用率ゼロ，リサイクルも全く行なわれない。すでにアメリカのある州では紙おむつの使用を禁止する法案が出されている。これらのことを知った時，生徒の間にはざわめきの声があがった。

最初と同じ質問に対して，賛成3名，反対34名と生徒の心は大きく揺れ動き，2名の生徒はどちらとも答えられなくなってしまった。

教師の動き	生徒の動き	指導上の留意点
∧あなたが赤ちゃんのとき，おむつは紙，布のどちらを使っていましたか。 ∧班に1つずつ紙おむつと布おむつを配るので，どのようなものか観察しなさい。 ○最近のおむつの使用状況について，説明する。	○自由に発表する。 ・全部紙おむつ　・全部布おむつ ・紙と布が半々だった。 ○布おむつと紙おむつを手にとって観察する。 ○教師の説明を聞く。	○自分が赤ちゃんのときのおむつの使用状況を発表させることによって本時の動機づけをする。 ○紙おむつと布おむつを実際にさわらせて，その感覚を味わわせる。 ○紙おむつが1989年に41億9千万枚，重さにして約21万トン使われ，最近はずっと布よりも紙の方が多いことを知らせる。
布おむつと紙おむつについて考えなさい。		
○プリントを配布する。 ∧プリントに紙おむつを使うことについて賛成か反対か，その理由をつけて書きなさい。 ∧紙おむつを使うことに賛成の人は手を上げて下さい。 ∧紙おむつを使うことに反対の人は手を上げて下さい。 ○黒板に賛成派と反対派の人数を板書する。 ∧布おむつの利点と欠点は何ですか。 ∧紙おむつの利点と欠点は何ですか。 ○布おむつと紙おむつについての詳しい説明をする。 ○資料のプリントを配布する。	○プリントに自分の意見を記入する。 ○自分がプリントに記入した意見に従って手を上げる。 ○班で話し合う。 ○布おむつの利点と欠点を考える。 ・何回でも使える。・通気性が良い。 ・長時間使えない。・持ち運び不便。 ○紙おむつの利点と欠点を考える。 ・長時間使える。・持ち運び便利。 ・吸水性が良い。・ゴミの増加。 ・木材資源の無駄使い。・むれる。 ○発表する。 ○教師の説明を聞く。 ○紙おむつが環境に及ぼす影響（森林破壊，ゴミ問題）を知る。	○他の生徒に影響されないで，自分の考えに従って手を上げさる。 ○自分と異なる考え方の生徒が多いことを知らせる。 ○布おむつと紙おむつの利点と欠点を考えさせることによっておむつの使用と環境とのかかわを認識させる。 自分の考えを持ち，話合いに積極的に参加できたか。（発表） ○紙おむつの使用による環境に対する影響を具体的数値で示し，紙おむつと環境とのかかわりをより深く理解させる。 紙おむつの環境に及ぼす影響を理解できたか。（観察）
紙おむつの大量消費について考え，紙おむつ使用の是非について話し合いなさい。		
▲このような紙おむつを大量に使うことをあなたはどのように思いますか。 ○賛成派，反対派の人数を再確認し，人数の動きを板書する。 ∧では賛成の人は右側，反対の人は左側に席を移動しなさい。 ∧紙おむつに賛成の人と反対の人で，お互いに自分の考えを発表しながら議論しよう。 ○賛成派，反対派の人数を再確認し，人数の動きを板書する。 ∧授業で思ったことや感じたことをプリントに書きなさい。	○自由に発表する。 ・森林を守るためには紙おむつを使うのをひかえるべきだ。 ・便利な物だから仕方ない。 ○自分の考えに従って席を移動する。 ○自由に自分の意見を発表する。 ○プリントに記入する。	紙おむつを環境と関連付けて考えることができたか。（発表） ○学級内を紙おむつの使用に賛成か反対かで座席を分け，今後の議論が進めやすいようにする。 ○同じ考えの生徒同士でしばらく相談する時間を最初にとる。 ○賛成派対反対派でいろいろ議論させる。 ○あくまで教師の価値観を押し付けないように留意する。

ウ　考察と今後の課題

使い捨て製品の典型である紙おむつの問題は，便利で快適な生活の追求と貴重な森林資源の消費が二律背反する問題であり，生徒の中に少なからずジレンマや葛藤をもたらした。

教師が価値観を押し付けたり，単純に良い悪いを決めつけたりすることのないように十分注意した。生徒の心の中に今までなかった視点を持たせ，さらに価値観の葛藤を起こさせることをねらい，揺れ動く心を大切にしていくことをねらった。

今後も生徒にとってより身近な題材を取り上げていくと共に，従来の道徳教育と併せて，より良い環境づくりに主体的に取り組もうとする強い意志を育てる指導法を追究していきたい。

Ⅴ　特別活動における環境教育

1　研究目標

環境や環境問題に対する個々の高まりを，自主的・体験的な活動を通してより確かなものとし，さらに身近な問題に対する積極的な実践力へ発展させることをめざす。

2　研究目標設定の理由

本校生徒は，昭和62年度以来の国際理解教育推進のもとで，自国や他国の文化を理解し，相手を思いやる気持ちの大切さを学んできた。これを「環境教育」という視点からとらえ直し，従来からめざしてきた「自主性の育成」をさらに発展させる必要がある。特別活動における幅の広い多様な体験活動を展開するなかで，生徒に自分の役割を認識させ，それを果たそうとする意志や態度を育成したい。また，友達と協力する過程を大切にさせ，自主的・体験的な態度の育成にも努めていきたい。さらに教科の学習や道徳で得た知識や技能などの生徒一人一人の能力を生徒会を中心とする望ましい集団活動において，より発展的なものとし身近な環境や環境問題に対して積極的に反応・対応できる実践力へと変容させたい。

3　研究課題

私たちは課題を設定するに当たって，特別活動における環境教育の実践は，生徒の主体的・創造的な活動を発展させることを意図した幅広い多様な取組を展開する必要があると考えた。そこで，特別活動の各分野において，次のような課題を設定し，それぞれの独自性を生かしながら実践を進めることにした。

(1) 学級活動

学級は，学校生活における生徒の学習や生活の基盤である。学級が身近な環境や環境問題に対する，より具体的な取組ができる場となるように努める。特に，環境にかかわる学級の取組の時間を本校では『グローバルタイム』と呼ぶこととする。

(2) 生徒会活動

生徒会活動は，生徒一人一人の自主的・創造的な態度に社会性を加え，さらなる個性の伸展に寄与するものと考える。環境教育においては，個人の考えや各学級での取組を全校的なものに発展させたり，清掃活動，リサイクル活動，ボランティア活動などを通して社会的・国際的な目を養う場としたい。

(3) 学校行事

学校行事は，生徒の集団への所属感を強め，より健全な学校生活を送るための体験的な活動の場である。環境教育との関連においては，各種行事ごとに環境にかかわるテーマを設定し，その中で生徒の自主的・創造的な活動を展開させたい。

(4) 地域・関係機関との連携

環境教育は，校内の取組だけにとどまらず，広く地域・関係機関との連携を図ることによってより一層の発展が期待される。そこで，ＰＴＡとの協力やＯＩＳＣＡ（財団法人オイスカ産業開発事業団）などとの連携によって，生徒の目を広く社会に向けたものとしたい。

4　研究内容

(1) 学級活動における取組

学級は，生徒の学校生活における基盤である。したがって，学級における体験活動をともなった環境学習の実践は，生徒の意識や行動に大きな影響を及ぼすと考えられるので，極めて重要な取組となる。

ア　グローバルタイムの設定

本校は従来，学級活動における国際理解にかかわる学習を「グローバルタイム」と名付けて具体的な取組を行ってきた。ここに“Think Globally, Act Locally”を意識した環境にかかわる学習を付け加え，グローバルタイムを一層強化することとした。

身近な環境や環境問題に取り組む中で，より良い環境づくりに自主的に参加し，環境に対して責任ある行動ができる実践力を養うことができ，さらに，友達との協力や葛藤の中で他への思いやりも学べるのではないかと考えた。

イ　グローバルタイムの実践例と計画

(ｱ) 1年3組における実践

平成5年度の1年3組では，学校の横を流れる地蔵川をめぐる環境学習の実践に取り組み，成果を得た。この実践は平成5年6月に開始され，平成6年3月まで半年以上にわたって取り組まれた。

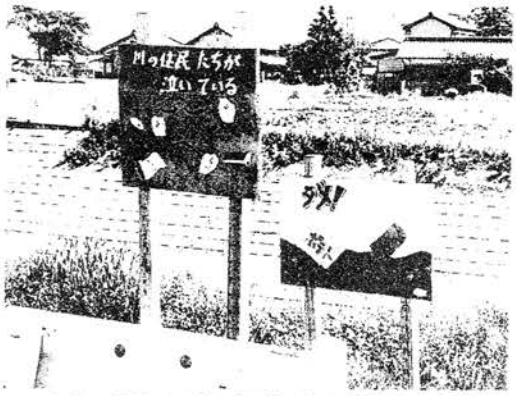
地蔵川の周辺のごみを拾う実践活動から出発し，パックテストを利用した水質調査の実践およびその考察活動を行った。平成5年10月の授業参観日には学級活動「水質報告会」として保護者にも公開した。平成6年3月には，地域にも呼びかけようということで「地蔵川を汚さないように」という看板を生徒が作成して立てた。

(ｲ) 平成6年度における実践

平成6年度は，前年度の反省を踏まえ全学級がある程度先を見通した指導計画のもとグローバルタイムの実践をしようということで年間指導計画の作成を行った。

各学級のグローバルタイムの活動形態は様々である。学活の時間を基本に，足りな

授業参観日の「水質報告会」（平成5年11月）



生徒が作製した看板（平成6年3月）

グローバルタイム年間計画

春日井市立南城中学校　第2学年2組

1　学級のテーマ

「ＳＴＯＰ　ＴＨＥ　環境破壊」
～身近な環境問題を調べ，自分たちができる環境保護を考えよう～

2　テーマ設定の理由

(1) 本学級の生徒の実態

本学級の生徒は地球の環境が破壊されていることを言葉として理解はしているが，その実態をどれくらい把握しているかとなると疑問が生じる。「ごみ問題」「リサイクル活動」などにより，地球にやさしくしよう，地球を守ろうといっても，行動面で表すことはまだまだ不十分である。しかし，生徒会活動で行っている環境に関わる取組によって，少しずつではあるが意識が高まりつつあるように思われる。

(2) テーマ内容とつかませたい事柄

人間の生活は，年々便利になってきている。これは文明の進歩からその恩恵を受けることによって，生活水準がどんどん高くなっていることによるものである。しかし，その一方で，人間生活による地球環境への影響は計り知れないものがある。便利さを追及する余り，地球環境への影響を忘れてしまっているのである。私たちの暮らしの中で，便利になってきた側面を否定することはできないが，現在の生活を見直し，改善できることがあるのではないか。どうすれば地球にやさしくできるのかを少しでも追及しようという気持ちを育てていきたい。

3　計画の概要

4月　　学級のテーマ及び計画の決定
5月　　地球規模の環境破壊の実態を知る
　　ビデオ視聴

「原油流出の海は今」　湾岸戦争後3年目のペルシャ湾に潜る
「地球の温暖化」「オゾン層の破壊」
「熱帯雨林の減少」「酸性雨」
「海洋汚染」「都市生活型公害」

6月　　身近な環境問題を見つめ，自分たちにできることを考えよう
「ＰＡＲＴ１：地球の温暖化を食い止めよう」
　　①　地球の温暖化とその被害について
7月　　②　家庭からの二酸化炭素の排出量を調べよう
　　③　省エネルギー生活を考えよう
8月　　④　「緑を育てよう」　家庭菜園づくり

グローバルタイムの年間計画例

い時間を裁量時間で補充したり，短学活の時間を有効に活用したりしている。一つのテーマをもとに，ある一定の期間取り組む学級もあれば，２～３時間の構成で様々なテーマに取り組む学級もある。活動場所も校内だけにとどまらず，学校の近くのショッピングセンターや河原というように校外に出る学級もある。理科的な要素を多く含んだグローバルタイムもあれば，道徳の授業に端を発している取組もある。生徒も教師も自由な発想と活動の中で，楽しく環境や環境問題に取り組もうという姿勢が見られる。

平成６年度における各学級のテーマは，以下のようである。

学　級	グローバルタイムのテーマ
１０１	ダイレクトメールについて考えよう
１０２	こだわるものの 上流・下流に旅をしよう
１０３	校区を見つめよう
１０４	１０４発「そこが知りたい」
２０１	生ゴミとゴミ問題（右下の写真参照）
２０２	『STOP　THE 環境破壊』（身近な環境問題から調べてみよう）
２０３	人と水の関わりにについて（地蔵川を見つめて）
２０４	ごみ問題とリサイクル
３０１	「くうかん鳥」を利用して南城に卒業記念品を残そう
３０２	地域の河川「内津川」を見つめよう
３０３	資源の有効利用とゴミ問題
３０４	自然と仲良くなろう
３０５	給食の残菜を利用して肥料を作ろう

(2) 生徒会活動における取組

ア　校外清掃の実践

平成元年度から取り組まれるようになった校外清掃は，生徒の自主的・自発的な活動の一つとして出発したものであった。それに「環境」という視点を付け加えることによって単なる地域の環境美化ということから，自分たちの身の回りの環境を考えるという幅の広い活動となっていった。

生ごみで堆肥を作る２０１の生徒

平成５年12月18日には，通学路を中心に校外清掃を行った。平成６年２月５日には内津川の河川敷の清掃活動を行った。平成６年度には今までに４回の校外清掃が取り組まれた。参加する生徒は，生徒会が実行委員という形でその都度募集をしている。教師が参加を促したりすることは行っていないが，毎回かなりの生徒が自主的に応募してくる。

校外清掃の様子（平成５年１２月）

イ　アルミ缶回収運動

生徒会主催の映画会に必要な資金を得るために始まった新聞一束運動であったが，平成

5年度にはリサイクル運動の一環としてアルミ缶を回収する運動へと質的に変化してきた。その時には12月と1月の10日間の取組で約1,000 個のアルミ缶を回収した。この運動はアルミ缶の数を集めることが主たる目的ではなく，アルミ缶を集めることによって，リサイクルの大切さを認識してもらおうという生徒会の意図があった。

〈 平成6年度の回収状況 〉

アルミ缶	約7，500個
スチール缶	約1，300個
トレー	約3，500枚
牛乳パック	約8，500枚
乾電池	約 250個

（平成6年9月30日現在）

ウ　リサイクル運動

アルミ缶回収運動でリサイクルへの関心は高まったといえる。しかし，生徒会執行部が平成6年3月に行ったアンケート調査の結果から，牛乳パックやトレーをリサイクルに活用している家庭よりも，ごみとして出してしまっている家庭の方が多いことがわかった。

アルミ缶の回収活動（平成6年1月）

そこで平成6年度はより多くの家庭で，より多くの品物に目を向け，リサイクルしてもらえるようにと，学校で牛乳パック，トレー，アルミ缶，スチール缶，乾電池を積極的に集める取組をした。ＰＴＡ総会を利用して，生徒会長が直接，保護者に協力を呼びかけたり，「環境だより」を使って，牛乳パックなどのリサイクルの方法などを啓発したりした。このように身近なところから少しずつリサイクル運動が広がっていった。

エ　学校での生活環境改善

生徒たちの間で，自分たちの学校生活について見つめ直し，その生活環境を自主的に変えていこうとする動きが見られるようになってきた。部活動時のＴシャツの着用問題がその一つである。生徒の間では，Ｔシャツ問題は，平成5年度から継続して審議されてきており，賛成派も反対派も，ともに建設的に議論を尽くしてきた。この問題は職員会議に諮られ，生徒会の取組の熱心さとＴシャツの有用性も考慮され，学校長の許可も得て平成6年7月から部活動時のＴシャツ着用が実現した。こうした取組により，生徒たちは自分たちの望むことをどのようにしたら実現できるか，さらに実現した後の責任と，それを維持するための努力というものがいかに大切かを知ることができた。この経験は，環境問題に取り組むために必要となる，自分達で考え行動するという能力や態度を養う上で，有意義な取組であったと考える。

オ　老人ホーム訪問

今年度に限らず以前から，生徒会執行部が参加者を募る方法で老人ホーム訪問は行われてきた。土曜日の午後，校区の老人ホームへ出かけ，歌やゲームなどをして老人の方と楽しい一時を過ごすという取組である。

老人ホーム訪問（平成6年5月）

老人ホームのお年寄りも南城の生徒が訪問するのを毎回楽しみに待っておられる。生徒にも大変人気があり，参加者数を制限することも時々ある。相手を思いやる心，優しい態度で接する気持ちは，環境学習の基本となるであろう。

カ　環境集会の取組

毎週木曜日の朝の生徒集会の時間（15分）を環境学習に使う試みをした。これは，全校生徒が体育館に集まり，環境や環境問題について考えようというものである。

平成６年１月27日の環境集会では，春日井市が制作したＶＴＲ「アルミ缶のリサイクル」を上映し，回収されたものが再びアルミ缶となって戻ってくる様子を学習した。平成６年２月17日には，前年の12月に，生徒会役員と環境委員で訪問した新菱アルミ缶回収センターの様子を自作ＶＴＲで紹介した。ジュースやビールの缶は半分がスチール製であること，アルミ缶回収率は約50％であること，ボーキサイトからアルミ缶をつくるよりもリサイクルしたものから作った方が経済的であることなどを学んだ。さらに，その日の環境集会では，今までに集めたアルミ缶を実際に披露したので，翌日のアルミ缶回収はいつもより多くの生徒が協力した。

平成６年度の環境集会は，生徒会中心によるリサイクル運動のＰＲ活動に多くが利用された。他には宿泊学習など，各学年の泊を伴う旅行的行事の報告会が催された。

キ　環境委員会の設置

総合的に環境や環境問題をとらえる生徒の活動組織として，平成５年度より環境委員会を設置した。この委員会の性格は，生徒が自主的に活動するという側面と，学校から依頼された活動をするという両方の側面を持っている。最終的には，国際理解委員会のように生徒の手に委ねられるものへと成長させていきたいと考えている。以下に示すのは環境委員会の仕事内容である。

【グローバルコーナーの設定と活用】

各学級の背面掲示板の一部に環境と国際理解関係の掲示コーナーを設定した。生徒会活動を紹介したり，環境だより，環境放送のメニュー，環境にかかわる新聞記事等の掲示をしている。

【環境講演会の運営】

ＯＩＳＣＡ関係の講演会やチェルノブイリ講演会の運営を担当した。

【アンケート調査の実施】

環境学習に関係する生徒会行事や学校行事についてのアンケートを実施した。

【環境だよりの発行】

身近な自然を見つめることを目的とした生徒向けの環境だよりの作成から始まり，生徒会や環境委員会の活動内容，学校行事の環境に関する取組の紹介をした。

【昼の環境放送】

昼の放送を利用し，週に１回程度の割合で給食時に環境関係の話題を取り上げた。各学級のグロバールタイムの紹介，化石燃料の問題，オゾン層の破壊などについて放送した。

【環境標語の募集】

平成５年９月に，全校生徒に環境に関する標語を募集した。最優秀となったものは体育大会で配布される鉛筆にプリントした。他の作品は掲示したりして発表した。生徒の環境学習に対する意識の高揚に役立った。平成６年度も同様に環境標語の募集をした。

【学校祭の展示】

活動内容をまとめて展示発表した。

ＥＡＲＴＨ～環境だより～（平成６年７月１６日号）

ク　各種委員会における取組

それぞれの委員会の活動内容を環境という視点でとらえなおしたり，新たに環境の取組を付け加えたりして，その活動を活発にするように努めた。主な目的と実践内容は以下の通りである。

【国際理解委員会】

他国の文化や地球環境を理解し，地球人としての自分を認識することを目的とした。国際理解室の展示を工夫したり，ＡＥＴとの交流会を催したりして，他国の生活環境を知る活動をしている。

【ベルマーク委員会】

グリーンマークの収集活動を通して，日常生活の各所に見られる様々な環境的配慮に目を向けることを目的とした。環境にかかわる取組が本来の委員会活動にも拍車をかけている。

ＡＥＴとの交流会（平成６年３月）

【緑化委員会】

緑化活動を通して植物に親しむ心を育てることを目的とした。花壇とプランターを使っての校内緑化や各クラスに鉢植え（緑の羽根募金で購入）を置き，植物を育てる活動をしている。

【放送委員会】

学校放送を充実させ，生徒の学校生活を潤いと活力あるものとすることを目的とした。昼の放送に「環境コーナー」の設定をし，環境委員の協力を得て番組を作成し放送している。

【図書委員会】

環境関係の本の充実とその利用促進を図り，読書が楽しめる環境づくりに努めている。

【広報委員会】

全校生徒の環境に関する意識を高めるため，環境新聞を２カ月に１回程度作成し，校内に掲示し，広報活動に努めている。

(3) 学校行事における取組

平成６年度は，環境そのものを中心に据えて企画したので，従来とは少し違う活動ができた。学校行事の中に，環境についての活動を無理なく織り込むということを基本にしている。

ア　校外学習における実践

平成５年度の１年生では南知多ビーチランドにいる生物について“調べ学習”をした。ウミガメについて調べたものが多く見られた。「目のないウミガメの子がふ化」という新聞記事などをもとに海洋汚染やごみ問題を主題とした道徳の授業へと発展できた。

イ　野外学習における実践

平成６年度の野外学習では，２日目に「イベント企画Ｂ」を行った。これは，５つのコースに分かれて自然と親しもうというもので，

野外学習でのイベント企画Ｂの内容

コース	コースの取組内容（概要）
1	「魚釣り」で，杉島荘というところまで豊かな自然に接しながら歩いて行き，板取川に放流された魚を釣り，自分たちで川原の石組みを利用し，塩焼きにして食べた。
2	「クラフト作り」でバードコールを作ったり石ころに色をつけたり，木の枝を加工したりして遊んだ。石を並べて世界地図も作った。これは持ち帰れないので写真を撮った。
3	「バードウォッチング」で，巣箱を作り，キャンプ場に設置したり，双眼鏡で野鳥の観察をした。ホオジロのさえずりなどが観察できた。
4	「自然の美・写真撮影」というもので，川浦渓谷で昼食をとり，板取川沿いの花や木々など美しい自然をカメラにおさめた。写真は現像した中から，一番気に入ったものを選び，大きく引き延ばして額に入れた。
5	「ハイキング」で，板取川の周辺を散策しながら，自分の一番気に入った植物を採集して，しおりや葉脈標本を作った。

コースの選択にあたっては，選んだ理由も書かせて希望を取った。その結果，自分の興味関心に合った体験活動を通して，自然に溶け込むことができた。このほかにも，板取川の水，水道の水，流しの排水について，それぞれの水質調査も実施した。水道の水や板取川の水のきれいさに比べて，食べ終わった食器を洗っている時の流しの排水が，いかに汚れているかを実際に知ることができた。２泊３日の野外学習を通して，自然へのいたわりの大切さ，仲間と協力することのすばらしさを学ぶことができた。

ウ　修学旅行における実践

平成６年度の修学旅行における環境学習のテーマを「住環境」とし，自分たちの住む春日井と旅行先の東京や箱根の住環境の違いを実際に調べさせ，考えさせた。

(ｱ) 交通量調査

交通量の調査を環境委員が行った。修学旅行が終わった後，選択社会で行った調査結果と比較し，考察を進めた。大都会東京は夜遅い時間でも交通量が大変多く，春日井や箱根との大きな違いを肌で感じることができた。

(ｲ) 東京人の意識調査

都内での班別見学中に，環境に関する意識を中心に調査した。多くの東京の人が「東京には緑が少ない」と思っていることがわかった。また，ほとんどの人が“ごみ”の分別収集に協力しているが，年齢が下がるほど分別収集に協力していないことも知った。生徒たちは，直接，東京の人に接して話を聞くという取組を通して，人の温かみも感じとったようであった。

(ｳ) 水の味覚と水質調査

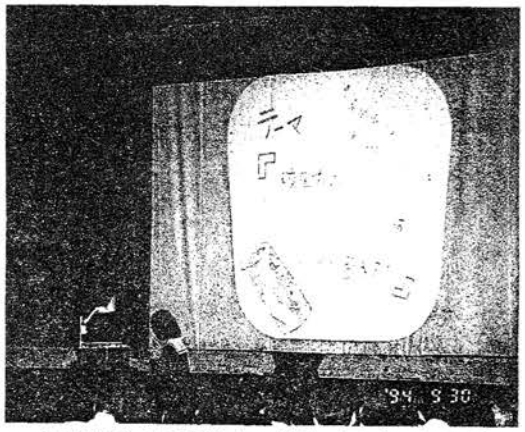
東京のホテルの水と箱根の旅館の水について，その味覚を全員で比較調査した。さらに，各班代表（計50名）が，東京と箱根の水を言い当てる調査も行った。100 %近い生徒がそれぞれの水を言い当てることができた。東京の水は苦みがあり，箱根の水は臭みもなく飲みやすいことを実感できた。

水道水の食味調査（平成６年５月）

エ　学校祭での実践

本校の学校祭の企画の一つに，運動部も含めたクラブ単位で取り組む「フリータイム」というものがある。平成５年度のフリータイムでは有志を募り再生紙づくりに励む企画があった。また，フリータイムでのゲームの景品として，石ころに色を塗った作品を作るなど環境に配慮した色々な工夫がみられた。

平成６年度の学校祭では，環境に関する夏休みの個人研究の紹介や展示をした。また，選択社会で取り組んだ研究を班ごとに発表した。校区の自販機の分布状況から地域の住環境についての考察，神領駅前の地域の様子から将来あるべき駅前の環境についての考察などをＯＨＰを使って発表した。



選択社会の研究発表の様子（平成６年９月）

(4) 地域・関係機関との連携による取組

環境教育は，広く地域・関係機関と連携することにより，学校の取組も理解され，より深いものになると考え実践を進めた。

ア　OISCAとの連携

OISCA（財団法人オイスカ産業開発事業団）は，昭和36年10月に創立された海外での植林活動を主な目的とする環境保護団体の一つである。春日井ライオンズクラブの協力も得て，緑を大切にする心と国際理解教育の進展を目的としてOISCAと連携した諸活動に取り組んだ。

(7) 環境講演会の開催

平成５年９月４日にOISCAの中部研修センターの鳥谷部氏による講演会を催した。OISCAが現地の人々の理解と協力を得て植林活動をしている話を聞いた。平成６年４月８日には，OISCAミンダナオ農林業開発センター所長の池田広志さんによる講演会を催した。現地での植林活動に10数年間にわたって携わってこられた池田さんは，フィリピンの森林が荒廃していったいきさつや現地の実態に即した援助形態の重要さを話された。

中　日　新　聞　1993年(平成5年)12月5日(日曜日)　近畿　(16)

南城中生がフィリピン植林ツアー体験報告　春日井

経済豊かでないが人間性豊か
日本の学校施設の良さを痛感
市民が積極的に環境対策参加

十一月中旬、フィリピン・ミンダナオ島への植林団の一員として参加した春日井市南城中学校三年生の男子三人が、春日井ライオンズクラブ（塚本憲男会長）が招待した国際的視野をもってもらおうと敢行した植林研修の公募に応じて、十一月十日から四泊五日の植林ツアーに参加。期間中の十三、十四の両日、同クラブのメンバーら五人と同島・ディポログ、ダピタン両市でマホガニーやマングローブなどを植えこんだ。

会場には生徒約四百八十人のほか、同クラブのメンバーら約四十人が出席、加藤孝去校長、植林団員の塚本貴義さんのあいさつに続いて、三人は現地で撮影したスライドを映し、一人ずつエピソードを交えながら発表した。

「ミンダナオ島は経済的には決して豊かとは言えませんでしたが、人間性はとても豊かでした」（松下一貴君）、「貧富の差が激しい。現状と比べ、日本の学校施設は豊かであることを痛感」（伊藤孝さん）、「日本の『ごみ』だけの環境対策に比べ、島では現地の人々が積極的に参加するなど、一歩も二歩も進んでいる」（立島恵）など、植林活動を通じ肌で感じた貴重な体験談を披露した。

報告の後、同クラブが今回の植林ツアー委託をしてこの植林が、クラウン・西側の広場で行われた。

植林活動の体験を披露する（右から）松下一貴君、立島恵さん、伊藤孝さん＝春日井市南城中学校で

中日新聞（平成５年１２月５日）

(4) 植林活動に参加

平成５年11月11日～11月15日の５日間，OISCAの国際植林ボランティア活動に本校生徒３名が応募して参加した。フィリピンのミンダナオ島で実際に植林活動を行い，同島にあるディポログ市のセント＝メアリー＝アカデミー校を表敬訪問した。現在もその友好は続いている。

(ｳ) 帰国報告会の開催

平成５年12月４日，国際植林ボランティアに参加した３名が帰国報告会を行った。この報告会によって，森林の大切さが身近なものとして伝わった。また，国際理解教育の面では広くアジアの人々にも目を向ける機会となった。生徒会からOISCAへ植林基金の贈呈も行われた。

(ｴ) 文房具を送る取組

一連のOISCAとの連携活動の中で，生徒会は国際植林ボランティア活動に参加した３名の生徒に託して，フィリピンの子ども達に「文房具」を送った。これらの文房具は，生徒の家で眠っている鉛筆，消しゴム，ノートなどを生徒会が呼びかけて集めたものである。

イ　チェルノブイリ講演会

平成５年10月18日にチェルノブイリ講演会を開いた。環境委員が資料をもとに，エネルギー資源の現実とチェルノブイリ原発事故について説明した。被曝した子どもたちを引率してみえたエレナ先生による講演では現在も事故の被害で悩んでいること，被曝したベラルーシの子どもたちを里親として日本の家庭に預かってもらい，健康回復に役立ててもらおうという運動が行われていることなどを知ることができた。

チェルノブイリ講演会（平成５年１０月）

ウ　地球資源回収活動

「廃品」を貴重な「資源」ととらえ，平成５年度からは，名称も「地球資源回収活動」と改称して意識の変容を試みた。具体的には，その趣旨が書かれた地球資源回収活動のお知らせに，回収担当者としての自分の名前を書いて，全校生徒が分担して，校区内の全家庭に配布した。さらに，事前の通学団会議ではリサイクル活動の意義を話し合った。こうした取組の結果，回収した古紙の量は，生徒数が現在よりもずっと多かった数年前の記録を大きく上回った。この活動は生徒とＰＴＡが共に汗を流し，資源の大切さを実際に学ぶ良い機会となっている。

エ　制服リサイクル活動

着られなくなったり，不要になったりした制服をリサイクルする活動に，ＰＴＡが熱心に取り組んでいる。資源回収の折りなどに集められた制服類は，この２年間で約６００点に及ぶ。これらを斡旋するために，授業参観や体育大会などで保護者が来校する機会を利用して「制服リサイクル会」を開催している。ごくわずかな手数料を払うだけで制服が利用できるとあって，この取組は保護者から大変歓迎されている。

(5) クラブ活動での環境学習の実践

美術の授業「１年；学校生活のデザイン」で，教室の表示板の最優秀作品が選ばれた。それを美術クラブ員が，色を塗るなどの作業をして制作を試みた。これがきっかけで，他のすべての特別教室の表示板も美術クラブが，アイディアから制作まで取り組むことになった。校内の雰囲気を少しでも潤いのあるものにしようというこの試みは，好評を博している。

5　今後の課題

(1) 学級活動において

グローバルタイムは他教科や道徳との関係から切り離せない部分があり，他の教科の知識を必要とする場合も出てくる。指導にあたっては，事前研究と準備のために多くの時間を要する。そのため今まで取り組まれた様々な実践を積み上げ，共有の財産としていきたい。

(2) 生徒会活動において

環境にかかわる活動を通して環境に対する意識は大変高まったように思う。さらに，生徒一人一人が環境に関する活動の意味を的確にとらえ，生徒会の活動を全校の生徒が足元から支えていくようにするための教師の援助・助言の在り方をさらに追究していく必要がある。

また，環境委員会が総合的に環境問題をとらえる生徒の活動組織の中心となり，少しずつ機能するようになったのは評価できる。しかし，常時活動を軌道に乗せることや生徒の活動をもっと前面に出すということでは不十分さが見られる。また，各種委員会については，環境に関する取組の必要性は理解できていても，具体的な実践という点では弱さがみられる。これらの弱点を克服するための方策をさらに追究していきたい。

(3) 学校行事において

野外学習をはじめとする各種行事に必ず「環境」という視点を取り入れるようにしたため，活動内容に幅ができ，参加度も高まってきた。今後は，学校行事における環境学習を息の長いものにしていくにはどうしたらよいかを考えていきたい。

(4) 地域・諸機関との連携において

OISCAとの連携活動やチェルノブイリ講演会の開催により，生徒たちは，広く社会や世界へと目を向けた環境学習をすることができた。その意味でもこのような取組は今後も機会をとらえて実施していく必要がある。さらに，最も身近な組織であるＰＴＡとの連携をさらに深め，学校と家庭が一体となった取組が今後一層望まれる。

Ⅵ　調査資料委員会における実践

1　研究目標

環境や環境問題に対する生徒の実態を調査する。また，適切な資料や情報を提供することによって意識の変容を図り，より確かな実践力の育成に資する。

2　研究目標設定の理由

今日，環境問題は人や地域によって必ずしも一様ではない。そこで生徒達の環境問題に対する意識を把握し，実態に応じた指導の内容や方法の改善に資する。また，一人一人が環境問題に関心を持ち，より良い環境づくりに心がけて主体的に行動できるようにしていきたい。

3　研究内容

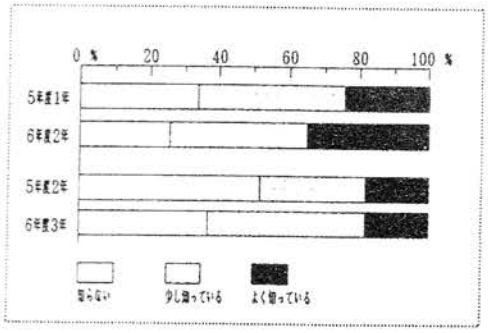
(1) 生徒の実態調査と考察

環境に関わる生徒の実態を把握し，各委員会の活動に生かすため「環境に関するアンケート」を実施した。特に2・3年生について，その結果をグラフ化して考察を行なった。項目は「関心」「知識」「態度」「技能」「評価」「参加」の6つの観点で作成した。右の表は，2･3 年生とも前年度の数字を上回った項目や内容である。

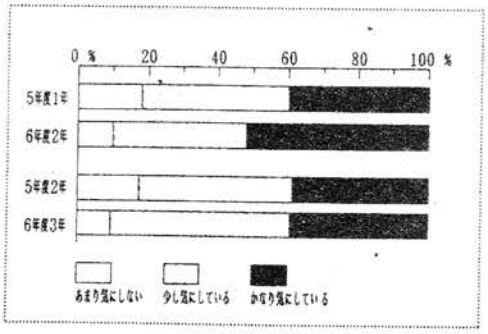
前年の調査結果を上回った項目や内容

観点	調査項目や内容
関心	道路や公園のごみ，ごみの処理能力，家庭排水の問題について，環境に関する読書経験
知識	ダイオキシン，グリンピース，エコマーク，環境アセスメントなどの用語
態度	ごみの捨て場所に気をつける，リサイクル活動への協力，過剰包装を断る，省エネ（電気・ガス）などの態度。
技能	商品のリサイクル，ごみで堆肥を作ることができる（3年生のみ前年を上回った）
評価	ごみの増加，田畑の減少
参加	生徒会主催の校外清掃に参加する人数

☞　エコマークについて知っていますか？



☞　ごみを出す量が処理できる量より増え，ごみが処理しきれなくなる。



(2)　グローバルルームの活用

ア　古本や資源回収で得られた図書を，生徒用ロッカーに分類して並べ，自由に閲覧したり貸し出せるようにしている。

イ　環境に関するビデオ（教材費で購入されたビデオ以外）を，生徒が放課にいつでも視聴できるようにしている。再生専用ビデオなので誤って消去されることもない。テレビ台をそのままテープ保管場所として利用している。

ウ　生徒作品の常設展示場所として利用する。

- 各教科，特に美術，技術家庭科，書写作品，各種作品展応募作品の展示等に利用する。
- 各種感想文を展示すると共に，整理保管する。

エ　開館時間は，朝の短学活時から下校時刻までとする。

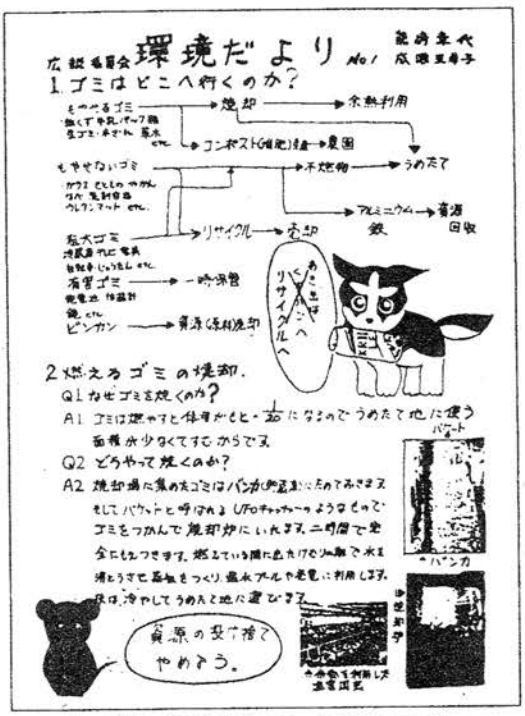
(3) 広報活動の充実

ア 「南城中だより」を定期的に発行し，保護者にも生徒の活動状況を知らせていく。資源回収の折りには，校区内全戸配布のチラシと併せて発行し，本校が取り組んでいる環境に関する活動を各家庭に知らせ，協力をお願いした。

また，「南城中だより」には返信欄を設け，地域の方々の質問や意見，要望など生の声を載せて編集し，一方的なものとならないよう注意している。

イ 広報委員会は創意工夫をこらし，かべ新聞「環境だより」を作成している。

ウ カナダ，ケローナ市の姉妹校ラットランド中学校と連絡をとりあい，お互いの町や学校が行っている活動や状況を情報交換している。



かべ新聞『環境だより』（広報委員会）

4 今後の課題

(1) 生徒の変容（「環境に関するアンケート」のデータ分析の結果）を，今後どのように活用し，新たにどのような活動が必要とされるのか，今後も引き続き検討していきたい。

(2) グローバルルームの活用法や各種広報活動は，資料の収集方法を工夫し，有効的な活用方法をさらに追究していきたい。

南城中だより　平成6年 6月14日（火）

春日井市立南城中学校

南城中のリサイクル活動について

―― 生徒会長　山口 寛知子 ――

ご父兄のみなさん，こんにちは，生徒会執行部です。
4月から役員も変わり，色々な活動を少しずつこなしてきています。

5月の半ばから，アルミ缶・スチール缶・牛乳パック・トレイ・乾電池を回収するリサイクル活動を行っています。前年度から行われてきているこの活動は，回を重ねるごとに回収率も増え，生徒の地球環境に対する意識も高まってきています。執行部としては，さらにこのリサイクル活動を充実させたいと考えています。それには，地域の方々の理解と積極的な参加が，ぜひとも必要なのです。今一度，地域ぐるみで地球環境のことを考えてみてください。そして，少し手間がかかりますが，アルミ缶などを捨てないで，リサイクルに出してください。

南城中学校では，昇降口に回収箱を置き，いつでもアルミ缶などを集められるようになっています。回収物がある程度たまったら，生徒に渡してください。

この活動は，資金目的ではありませんが，集まったお金は生徒が楽しい学校生活を送るために使わせていただきます。

ぜひ，このリサイクル活動にご協力よろしくお願いします。

常時活動としてのリサイクル運動始まる！

《アルミ缶》 5／13日から南城中学校に回収箱が常設されるようになりました。ぜひ，回収箱へ入れてください。入れるときは，つぶして入れてくださると助かります。また，ひとこと欄にありましたように，ご父兄が運んでくださるときは，教師あるいは生徒に渡していただければとおもいます。

《スチール缶》 アルミ缶と同様です。

《牛乳パック》 いままで，回収していませんでしたが，商品回収のおりに持参してくださることがありました。今回から常時回収していきますので，中がわにアルミ箔のはってないものを洗い乾かして回収します。

《トレー》 ご家庭によっては，ためておいてデパートなどの回収に持っていかれたようです。各家庭での使用頻度も高く，新しく回収するものに加えました。

《乾電池》 学校内では，使い古した乾電池を回収していました。乾電池は，どの家庭でも常時使われる所にきちんと処理されるということがあまり，行れておらず将来的に大きな問題になると思われます。そこで，乾電池がどのように処分されるかも調べて回収にふみきることにしました。ぜひ，生徒会にご協力をお願いします。

《古　本》 今回から，回収をはじめます。

「地球資源回収活動」に御協力を！

6月18日に（土）廃品回収が行われます。新聞等を回収した資金で生徒たちの活動にあてるということもありますが，それ以上に貴重な資源の再利用を目的としています。また，新しいこころみとして，古本を回収したいと思います。ご家庭で使われていない本など，ありましたらぜひ提供してください。環境に関する本など，生徒が使用できるものは，（図鑑なども含め）環境委員を中心にグローバルルームで生徒が自由に読めるように設置したいと考えています。あるいは一部は売却して生徒会で活動資金にできたらと考えています。ぜひ，ご協力をお願いします。

ひとことより

・グリーンマークを集めています。

・バザーなどに不用品を出してリサイクルしています。

・市民広報で環境学習をしていることを知り，すばらしいと思いました。小さな積み重ねが，大きな喜びになることはすばらしいです。

・トレー，アルミ缶，牛乳パックの回収をしていますが，今，生ゴミについて考えさせたいと思っています。

※ リサイクル活動・資源回収への意見，希望，あるいは「たより」を読まれた感想などどしどし，みなさんの意見をお寄せください。

ひとこと　組　氏名

南城中だより（平成6年6月14日号）

Ⅶ　研究の成果と今後の課題

1　研究の成果

(1) 教科・道徳における環境教育の推進，特別活動における環境教育にかかわる様々な体験学習の実践により，少しずつではあるけれども確実に子どもたちが変容してきていることを感じる。目標に掲げた「育てたい生徒像」が徐々に具体的なものとなりつつある。

(2) 日常の教育活動の推進と研究委嘱を受けた課題の追究を両立させることは，率直に言って，時には困難な状況を生み出すこともある。このような状況を克服する手だては話合いによる共通理解を促す以外にはなかった。こうした過程を通して，環境や環境問題に対する教師の意識は確実に高められた。

(3) 環境教育年間指導計画の作成には全教師が分担し協力しなければ完成しないという前提条件が存在した。このことが私たちを環境教育へ駆り立てる一つの要因となった。平成5年9月に第1次案を作成して以来，授業での検証を通して3回の改訂を行ってきた。この作成の過程を通して教科の環境学習の構築と教科および領域相互の連携が図られ，教師集団の意識も高められた。

(4) 環境教育の授業実践は，ともすると研究発表のためという狭量なとらえ方に陥りがちであるが，最終的には生徒のためになるばかりか，教師自身の力量向上にもつながる課題であるとの共通理解の上に立って，授業実践を進めることができた。

(5) 環境教育の目標を達成する上で道徳教育の果たす役割が大きいことを知らされた。道徳における環境教育の取組は，学活や教科との区別がつきにくくなったりする困難もあったが，授業研究に積極的に取り組み，一定の成果を得てきた。

(6) 「グローバルタイム」と名付けた学級活動における環境にかかわる学習は，すべての学級で実践が行われ，様々な取組の事例を積み上げることができた。

(7) 従来から生徒会の自主的活動として取り組まれてきたリサイクル活動や校外清掃なども，環境にかかわる活動として位置づけなおすことにより，自覚的な取組がなされるようになってきた。また，新たに発足させた環境委員会が総合的に環境問題をとらえる生徒の活動組織として機能するようになったことも成果である。

(8) OISCAと連携し，国際植林活動への協力として，環境講演会・写真展の開催，ミンダナオ島での植林ボランティア活動への生徒3名の参加，帰国報告会等の一連の取組を行った。これらの取組によって，広く世界に目を向けた環境学習をすることができた。

(9) 環境教育を推進していく中で，家庭（地域を含めて）への働きかけの必要性を感じ，広報活動として「南城中だより」を平成6年3月から発行し始めた。現在は月に1～2回の割合で発行を続けている。保護者からはいろいろな感想や意見が多数寄せられている。

2　今後の課題

(1) 環境教育の推進は「新しい学力観」の実践につながるという考えに立ち，今後も授業法の改善に努め，指導法および評価法についてさらに研究を深めていきたい。

(2) 「環境教育年間指導計画」の検証に引き続いて取り組んでいきたい。また，「軸テーマ別環境学習配列表」についても構造図的な表記方法も念頭に入れて検討していきたい。

(3) 道徳教育の実践をさらに深め，道徳教育と環境教育のかかわりを明らかにしていきたい。

(4) グローバルタイム（学級の時間における環境学習）の実践をさらに深めていきたい。

(5) 生徒の自主性を育てる上で生徒会活動の果たす役割は大きい。生徒会活動の自主的活動を充実させる教師の援助・指導の在り方を引き続き追究していきたい。

(6) 地域（家庭）との結びつきを強めるための広報活動を継続して展開していきたい。

お　わ　り　に

研究委嘱を受けて以来，およそ１年半が経過しようとしている。折りしも平成５年度は新学習指導要領が完全実施された初年度であり，それと時を同じくして研究がスタートしたのである。環境教育としては，愛知県における初めての研究委嘱であり，さらに，テーマもたいへん大きなものであることから，何から手をつけたらよいかを模索しながらの出発であった。そこで，全職員が「環境教育指導資料（中学校・高等学校編）－文部省－」をもとにして学習することから始めた。

研究の出発点はそれを推進する基盤となる研究組織づくりである。学校の教育活動全体を通して環境教育を進めるという研究の基本方針から考えても，組織づくりは重要な課題となる。そこで，全職員に希望調査を実施し，できる限り希望に基づく編成になるように心がけた。さらに，課題を明確にするために，先進校の視察や先行研究の調査，全国規模の研修会への参加等に取り組んだ。

研究の推進に当たって，私たちは要請訪問を重視して実践を進めてきた。この１年半余りの研究期間における４回にわたる要請訪問を研究の重要な節目とし，愛知県教育委員会，愛日地方教育事務協議会，春日井市教育委員会の指導主事の先生方の指導・助言を仰ぎながら，授業研究や体験活動における様々な実践を検証しつつ，求める方向を模索してきた。

私たちには，まだまだ多くの課題が残されている。研究発表を一つの通過点ととらえ，今日までに培ってきたささやかな成果を基盤に，さらなる研究の積み上げを図っていきたいと考えている。

最後に，本研究を推進するにあたり，愛知県教育委員会をはじめとする関係諸機関並びに関係各位より寄せられた温かい御指導，御援助に深く感謝申し上げたい。

主な参考文献

- 環境教育指導資料（中学校・高等学校編）　文部省
- 中学校指導書（各教科・道徳・特別活動編）　文部省
- 中学校・新しい学力観に立つ授業と評価の手引き　明治図書
- 自己教育力を育てる発問と話し合い　ぎょうせい
- 授業活性化の「バズ学習」入門　明治図書
- 地球化時代の環境教育（全４巻）　国土社

研究同人

平成６年度	加藤孝史	堀場正美	武山春雄	伊藤和人
	大澤達夫	山中　潔	柴田裕史	説田　裕
	寺川たまみ	川瀬裕美子	白井美智子	佐方利明
	小川修治	長江啓司	林　幸秀	酒井ゆり子
	鈴木康英	倉橋克彦	堤　泰喜	穂迫順一
	別府輝志	三浦　亮	舟橋佳世	垣内秀幸
	米山友加里	石井友季子	吉本小枝子	
平成５年度	中條聰子	菅野卓也	山﨑美鈴	舟橋偉年